第四百三十五號目次

口繪　迎設　カウルバッハ氏畫

御埋葬

社說　御開業、信心堅固なるべし

家庭
家庭の樂は小事より成る（大鉢のはなし）　大名
ある商人の物價實一家評付の天秤、御馳走
◎生計の度合（山師、失敗者に存する）　女子
手藝案内（二）（刺繡、縫ひ）
さからぬひ、さしぬひ、星ぬひ、糸ぬひ◎肉入ぬひ
すがぬひ（欄の事）
ひさり言（婦人の未生、夫婦配合の氣質、子供の前にて、子供を譏る事）　紫琴女

文藝
小說家と同情（一葉全集を讀む）　隨村
和歌（池袋詩風外數氏）

史傳
史料散錄（三）　如雲散士

問答
難める友の為に問ふ、其答、

講義
炭と薪（関門具大人の講義）　曲浦子

雜錄
村夫子
片々錄　さよ子

隨感
迎春の間に與ふ、外六件

時文
諸少年に寄す、交際心得、武裝束、少年諸君
問題小說、其目的、問一變、例作、野依館　[illegible]

寄書
篤志看護の功行賞　倍觀子

片々◎時報

女學雜誌定價表

前金（一冊　　錢、一年前金　　　　無郵稅）

廣告料　一行（廿四字詰）前金十錢、一同以上三割引、六回以上　　割引。但し不適當なる廣告は謝絶す。　郵便切手代價に引受く

送金　為替は東京郵便局宛にて、小為替の得難き地方の人は五厘切手にて一割増の事

注文　注文は東京神田區…町…番地女學雜誌社宛にて申込まるべし

社告

●本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

●十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女界教界に對する吾黨の主義を發表するものとす

○單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば、其望に應ずべし

第四百三十四號目次

皇太后宮陛下崩御

社說　無常に感あり◉御養

女學
鋼鐵たる宮家の女學◎決死の覺悟◎婦人の論功行賞に際して彼篤の果てを兵站病院◎七女史を憶ふ
女學校の育兒科◎一家の仕方◎年頭禮儀を廢る

評論
政治論　如雲散士

教育
今の武育、教育家其識を重んぜず（曲浦）◎小補
好事子を說く、俗を許む、大恩師◎稲翁、氣品さ下
品教育を非難しは大俗なり◎教育界の害
各國教育雜誌、帝國教育會、北海道
教育會◎米國の兒童研究◎大坂博愛社の

雜錄
若松賤子の書翰（巖本善治）、菓子に與ふるの書（高柳有美）、小說大日（上）むつそむ

隨感
新年を馬鹿にすべからず◎老人を馬鹿にすべからず◎製氷、宋中川翁、文の話に讀ます、相に讀む

時文
新小說第二年第一號◎沖の小島（◎翠光散人）◎一葉全集

片々◎時報◎廣告

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

小川一眞

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

小川一真製

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

御埋葬

明治三十年二月八日　御柩を山陵に埋め奉る。帝國の山河、御影を拜すること六十有四年、新日本陛下に陪すること三十年、近く非常の御事ありてより、臣庶四千萬、只一向に御棺を護ること殆んど一月、遂に見えざるの地中に恨を送りて、遙かに深く御躰を埋め參らす。茲に初めて幽明二界の斷絶を意識す。

然りと雖ども、御魂長久に在り、大靈限りなく斯土に臨み、斷えず、髣髴として、庶民を眺め玉ふらん。吾等、之より無形の形に拜して、彼の蒼々を仰ぎ、白雲の去來に念じ、芙蓉の卓絶に望み、つら／＼記憶の鮮やかなるに痛感して、數度びなつかしき御影に祈らまく欲す。夫れ、人に追懐の氣稟を賦せられしぞ感謝すべき哉。久しく之を記して幾度も之を復し、其都度、之を新たにして又幾度も之を念じ、繰返し／＼て其覺えを長遠にするとを得るや、何等の特許ぞ。吾等之を造化に感謝す。

謹しみて承るに、英照皇太后陛下の先帝に後れさせ玉ふや、御歎き喩ふるに物なし。朝々夕々の御弔ひ、未曾て廢せず、靈前の御供養三十年一日も休め玉はず。御暇ある折々は、先帝御形身の御衣を解かせて、百線千筋の糸を一つ一つに掻きほどき、更らに一つ一つに組み合はせて新らしき御布に織らせ玉へりとかや。實に心無の糸線も優しき御心の誠には打しめりやしけん。むかし龍躰に觸れ參らせしものの一線だに新たに御手に掛らぬはなし。之を解き之を結び之を組み之を織らせ玉ふ間の御心掛こそゆかしけれ。落し玉ふ御涙、其色を鮮やかにしたるか、凝め玉ふ御誠、其織目を濃やかにしたるか、千經万緯皆これ御血脈に染まりしもの耳。誰か此の新しくして故き御衣を拜して感泣せざる。

夫れ吾等臣庶は宮庭に近づく可らず、如何にして、其の御遺物を拜するとを得ん。左れど、陛下の文徳は流布して既に吾等の胸臆にあり。吾等一々之を數へて心念の記臆に列ね、織て錦繍の衣となし、疊みて恭しく吾が衷に奉藏せば、庶幾くは長久に御影に接するを得ん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第四百三拾五號

明治三十年二月十日發兌

社説

御園藝

英照皇太后陛下は、園藝の御好深く、御所の庭、御料地の園などにて、くさ〴〵の試作あらせられ、御手入淺からざりしとぞ申す。

こゝをもて、園藝に關する文書どもを取分けて愛讀ましましけるが、就中、麻布學農社の發行にかゝる農業雜誌は初號より御買上にて、毎次御講讀遊ばされ、曾て一二號の欠本を生ぜし折節、太夫を遣はして殊更に補充せしめ玉へり。此度ノ御事ありし後、數日其筋より該社に命あり、自今農業雜誌郵送に及はずと。御愛讀の思憶ひ起され、忝けなさ忍ばれて今更の如く賞讃せられしとぞ。

四方の婦人、園藝に心を掛くるは、　陛下の御好の範に則とるなり。須らく、御意を奉躰して、主婦に恰好なる此の勤務に盡力すべし。園藝は、單に利得なるのみならず、又た快樂なり、引いて室家の團欒に影響するもの亦た尠からず。西洋の農學者輩は論ずらく、家に園藝あれば、兒孫、外に迷はず、常に家庭の遊樂を好むに至らんと。

信心堅固なるべし

人苟くも信心なかるべからず、別して女性に於て然りとす。良人を補けて奥ゆかしき助力を爲すにつけ、一家を治めて出入の人々の心を和らぐるにせよ、又は其子を教へて一生不拔の良感化を心の底に種ゑ付くるにせよ、總じて信心の功德に由らざるはなし。

信心と云へば、後生來世の事のみと心得たまふ族もあれど、そは誤まりなり。素より未來を說かざるにあらねど、最と遙かなる未來を說くはどなれば、現世を說くとは既に明らかな

らずや。信心の有無は、吾が靈魂の安否に關するのみならず、實際日常の事業に影響すると多し。物にいたみ、哀れに動きて、慈悲忍辱の心掛優しからずば、人の爲す事すべて懸々しく、情愛の胸に落入りて其腑に合するとを得ず、兎角に滿足の念ひに適ふと能はざるべし、人も亦た悅服すまじき也。然に才氣餘りあり、智慧敏捷にして、眼力行き屆かざるとなき人あらんに、其働らきは申分なく、之と云ふ手落のあるにもあらねど、只だ何となく心の寄せがたき感覺して之に一身を托せんとは思はず、所謂る敬すべくして親しむべからざるなどの遺憾あるべし。斯る人に限りて、其の宗敎的情感に乏しく、必竟、信心と云ふものの無きが故に此の不足を生ずるとの知了せらるべし。此は、人情の微妙に注意せし族の決して看過せざる所ならん。

左れば、一家内は言ふに及ばず、奉公人又は出入のものに至る迄で、只だ何となく歸服し、陰ながら其姿を懷ふて愉快に感ずるとなどあらんには、必らずや其人に堅固なる信心ありて、密室一己の修養の尋常ならぬとを推諒するとを得べし。蓋し、信心とは、人の心を幽遠の界に結び付け、一種玄妙の電氣、神人の間に交通するものなれば、其心の下に向ふときは極めて柔順慈愛なると共に、其上に向ふときは、太はだ壯嚴崇重なり。左れば、柔剛よく兼ね、恩威並び存し、春雨の慈々たると同もに、秋風の肅殺たる氣味あり。妙に人生の要處に適當し、人と交はるに恰好の德を生ず。故に、信心は天に交はるに必要の心たるのみならず、併せて人と交はるに最良の情誼たる也。

況してや、艱難に堪へ、忍耐に勇み、悲哀に望を起し、憂苦に樂天の情を振作するなどは、所詮、信心の發起にあらざるはなし。一家一國に憂ひあるとは多く、慶びあるとは稀なり。よく此の歎きに處して其道を履み違はぬは、信心の修養に由るを第一とす。良人、艱難に沒し、愛子、憂苦に沈まんの時、忽まち光明を暗黑の裏に發揮せしめて、裕かに其心を慰さむるの力は、之を何處にか假らん。亦これ信心に由るを第一とはせずや。

惟へらく、今の人、總じて此の必要莫る可らざるの心を忽諸にし、極めて良き此の强大の助けに委賴するとをせで、徒らに事物の末に惑溺し、もしくは徒然として其の賴りなきに彷

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

徨す、痛ましからずや。元と是れ人々本來の具躰あり、親から此の殊勝の心掛を懐き乍ら、殊更に發揚することをせず、空しく他の賤劣に執着す、深く惜しむべきならずや。新年、凶事あり、人生、頼むまじきを示す。万乘の御位にも無常の風は吹き止まず、戸々の熒々たる燈火、豈にいつ迄か燃えんとは期するや。速かに發心して流轉の羈を脱し、悔悟大覺の信意を振起して早く安心の域に入り玉へと勸む。

家　庭

家庭の樂は小事より成る

西洋に「世の中は些細なる事より成る」と云ふ諺あり。至極味ひある金言と云ふべし。人々、閑に乘じて議論するときは、大勢、大事件などゝ唱へ、世は總じて大業の理窟によりて左右せらるゝものゝ如く言ひ做せど、熟々實際世間を觀じて微妙の消息を探れば、豈に圖らんや、世は風塵砕屑に驚ろかさるゝを常とし、笑ふべく嘲ける可ほどの些細なる事件によつて動搖することの太だ多きを見る。况してや、人の感情に對する影響に於ては、其の喜憂する所、大率小事にあらざるはなし。人もとより大事に喜憂せざるにあらねど、大事の喜憂は其の來る自から應揚なれば、其の止まるにも亦た餘裕あり、人は存外之に切迫せざるものなれど、小事に當りての喜ひは胸一杯に滿足し、其の憂ひは身を切るほどに苦しく感ずるが如し。頗ぶる奇態の譯柄なれど、實際普通の人情に於て免かれざることなれば、亦た致し方もなかるべし。

就中、一家内に於ての平和不平和は、極々些細なる事の集合より成るものゆゑ、家庭の人たらんものは取分け此邊に用心せざる可らず。言はずとも分りたることなりとも、言はば倘更滿足すべし、言ひて差支なきことなりとも言はざれば一層愉快に感ずるなどの場合は、家庭内に毎度ありがちの事なり。一枝の梅、蕾は稍や開きかけしほどのものも、手折りて家づとにすれば千万無量の香ひあり。一壺の漬物も、通りがけに心にかけて、土産にすれば山海の珍味に同じ。さこそお寒かりしとの一言は、言はずともの事と申さんが、言はゞ何程の滿足ぞや。互ひに思ひ遣りて勞を減らさんと仕向くれば、家庭の内、爽快にして敏捷なり、ちとの凝滞もなくなるべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

送り迎への歩みは、家内にありては一間二間のことなれど、家外の歩に影響するは一里二里の數ならず。遠慮するにあらず、互ひに思ひ遣り、氣遣ひするにあらず、互ひに心にかけ、若し一人不在にても直ちに寂しく感ずるほどなれば、一家の内は常に長閑かるべし。

火鉢のほとり

家庭の談話は、道理を語るにはあらず、趣意あることを語るにもあらず。往々は、たわいもなき根なし事、又は心に浮むおかしげの事をも、別して容赦なく語り合ふの所樂しきなり。言はば、他人ならば馬鹿々々しきことと笑はるべきことも、隔てなき間柄の常として、吾ひとり心に浮べて想像すると同樣に語り出づる所、眞に樂しき也。外に出でては、一世を動かすほどの才覺ある人なりとも、家庭に居ては、何の變りもなく只だ尋常一樣の人物にて、此人に何の優所あるべきぞと思はるゝほどが樂しき也。法界差別なし、人間もと優劣なし、事業に當つてこそ止むを得ず非凡非々凡の差別をも生ずるなれ、洋々たる家庭に居て、親子兄弟夫妻、打くつろぎての團欒に、何の俊傑、何の烈女かあらん。そも〳〵此等は、事ありての後の究屈なる評判にかゝりし迄の事とは知らずや。冬季、火鉢を圍みて、にぎはしく笑ひ談ずる室家の物語りを聞けよ。何處に哲學ある、何處に英雄ある、譯もなく、たわいもなき、抱腹絶倒の語らひに、人生の幸福と云ふものはあるべけれ。人徒らに澁面して小六かしき事をのみ言ふ莫れ、蓋し必竟、本來の成佛を爲さざるが故なり。

○大望ある商人

大望ある商人は、一時に大まうけを爲さんとすることなし、夫故割の好き商賣に目を着けず、利の少なき方に心を寄するとぞ。そを何の譯合ぞと聞くに、利の多き商賣は、得意狹く、賣れ口久しからず、之を合計して見れば、つまりは高の小さきものなるが、之に反し、利の少なき商賣は、賣れ口廣く長く、得意宏大なれば、目前一時の利得は少きやうなれども、つもりて見れば大相の高となるゆゑ也。左れば、大志ある商人は、小利のあきなひに目を着け、曾て投機僥倖の野心を起さずとぞ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○物價騰貴

此頃の物價騰貴は慘まじきものなり。大抵の割合、數年前よりは三四割方騰貴せしゆゑ、茲に百圓の金を用ひて買ひ得べき品物は、數年前の六七十圓の品なり。公債の利子又は月給々料などにて衣食する面々は、前と同樣の收入はあり乍ら、其の實際は知らざる間に三四割方減却せしと心得ざるを得ず。扨て、斯く一概に物價の騰貴せしは何故ぞと云ふに、品物の減りし爲にもあらず、注文の殖えたる故にもあらず、必竟は世間流通の金が增加して、通貨と物品との割合が變はりし故なり。金が多くなれば其價格は下るべし、金の價格が下れば、品物の格が上る譯にて、喩へば、子供の遊ぶシーソーの如く、店頭に用うる天秤の如し。一方の下ると云ふは、他方の上ると云ふことにて、つまりは、同じことを言ふなり。されば、今の物價騰貴と云ふは、通貨の增加したるの由來なれば、之が減ずれば物價も亦た下るべし。其關係お互ひ樣の如く、平均して損得なき人もあれど、金錢の貸借をするもの、月給々料にて衣食するもの、公債の利子を收入とするものなどは、非常の損得を感ずべし。他なし、金の價格が上り下りをすれば也。夫故、田舍の地面もちなどが、家の仕方を立て借金を返すなどの時は、此節の塲合を利用し、他日、物價下落の時、また地所を買入れて恢復する也。凡そ、金錢の貸借をする人などは、斯る際が一番注意の時機なり。扨て、今後、此の物價の騰貴は尚續く可きか否やと云ふに、政府の會計の樣子によりて考ふれば、また〳〵二三年は漸次に騰貴するとも、下落はせざるべしと思はるゝ也。

○一家備付の天秤

一家の經濟は、出入僅少にてつまらぬものゝ樣に思ふべけれど、前に述べたる如き物價高下の影響は、此處にも亦た同樣の關係あらん。譬へば大風のひゞきは、亭々たる松柏にも、ひろき小草にも一樣に到來するが如けん。左れば、一家に於ける影響を鑑みて、天下の影響を知り、一家の經濟より推諒して、國家の經濟を考ふることを得べし。之を居ながら大勢を知るの道とす。戶々の主婦たるもの、たゞ一概に天下の經濟に不知案内なりと卑下する勿れ。室に天秤あり、常に上下して世

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

間の方向を示すにあらずや。

○御馳走

衛生學と云ふもの開けてより、切りに滋養料理を言ふものあり。ソップ、牛乳、肉食、肝油、スコット乳劑と色々結構の品數はありといへど、此等の滋養品をあてにして、辛うじて身躰を丈夫にすると云ふは、最早や末の事なり。先づ以て、活潑に運動し、食物の味をよくし、必らずしも品の善きが爲にあらず但だ腹の空いたるが故に味をよくして、斷えず愉快に日を送るこそ、衛生學の本意なるべけれ。故に御馳走とは、品の上等なるにあらず、其の文字に示す如く、只だ馳走するにありと心得てこそ面白味はあるべけれ。

○生計の度合

生計の度合は、立上りたるが開化なるは言ふ迄もなけれど、物の大小と、事の緩急と云ふともあれば、今の日本の如き創業進取の折柄には、人々其生計を低くし、俗に所謂る生産的の事業に資本を増して、大に貨殖するの工夫第一なるべし。一と度び生計を高くすれば、低くは出來ぬもの也。學問は坂に車を押す如しと言ひて、上るとの六かしきものもあれど、只だ〳〵上るとの容易き風船の如くなるは、生計の事なるべし。着物を立派にし、門構を大くし、交際を華美にせざれば、出世の出來ぬやうに思ふは、自信力なき人の言ふと也。かゝる人の出世は多少僥倖にて、分不相應なれば、いつかは落つるとのあるもの也。其時第一の苦しみは、吾が生計の進み居るとなるべし。人は初の出次第にて、如何樣ともなるべし。流義を定めて突き通さば、交際は左程六かしきものにあらじ。但し、吾生計の爲にすると、元入の爲にするととは、自から別なり。商人が、廣告の氣味にて大業の事をする場合もあらんが、之は廣告料にて元手の中なり、初めより吾が奢にあらずとして之に慣れざれば、差支へなし。要は、活潑の吾身を生計の奢の爲に制せらるる莫れと言ふ也。心にしかときめて、故意分別ありての思案なれば、夫は如何ほどの榮華をも盡すべし。皆事業の目論見のうちなれば也。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○山師

智慧才覺あるものを山師々々と言ふとは、昔し或人の嘲けりたることなれど、總じて今の山師ほど氣の小きものはあるまじ。黒田如水が「世はきちやうめんの事のみにて行くものにあらず、時としては雪駄片足、下駄片足と云ふ事を知らざる可らず」と其子に訓へたることもあれど、之は機を察して、先に後れぬと云ふの主意なり。十分の見込、十分の覺悟ありて、則ち乾坤一擲の運だめしを爲すを山とも言ふべきが、此時には、一心虚明、念頭無想無邪にして、苟しくも、吾命を惜み、吾利を思ふの事ある可らず。然るに、今の山師なるものは、僅の金を以て若干の利を得んと執着し、初めより心に凝滯する所あつて手を下す故、多くは當らず。當るも初めより小心の爲す所ゆゑ、格外に悦びてつまりは吝に費やし了るのみ。世に之を山氣、勇氣などと列べて、氣の大きなる方に齒ひせしむ可けんや。實は甚だ氣の小きもの也。凡て、自然の運行を樂しみ、物の順序を待ち、十年二十年の經綸を立てて徐に企圖する所ある大辛棒をこそ、氣の大きなるものと言ふべけれ。尚且つ機會到來せば、疾風迅雷の勢にて、身を忘れ、利を忘れての大飛躍を爲すも亦た賞すべし。然るに此の二つの何れも出來ず、只だ目先のつかぬ小さき投機事業に、僅かの資本を卸さんとするは恥かしきことならずや。去年來、一時流行の株に手を出して損せぬものある乎。よし一時まうけたりとも、其のまうけしが爲に、遂に損せぬものありや。あらば、其は非常の用意せし智者なるべし、他の一般の人々は共倒れにて、つまりは、吝に費やしたる迄の事ならずや。

○失敗者に看護せよ

主人失敗せしとき「ソレ御覽なさい」と言はぬ計りに、もてなすは、即ち是れ細君の失敗なり。看護は女の役なり。手きずを負ひし人にやさしくこそすべけれ、之を非るとのあるべきや。まして、其の妻をや。傷を包み、ウミを吸ひ、失望を慰さめ、憂悶を散らし、元氣回復の勇氣をもて再び出陣せしめざれば、妻は其耳人同樣、女の失敗を爲せし也。たとひ、初めに忠告したる通りの結末となりしにせよ、吾說を

用ひ玉はざりし故なども言はんずる氣色を毛頭も現す可らず。反つて、我說の當るやうになりしを恥るほどに悔み、良人に代つて自から歎くべし。自問自答は、良人の心中にあつて自から生ぜん、妻たるものの言ふべきことにあらず。殆んど、前言を忘れたるかの如く、只管ら今の失敗に同情を捧げて、其の苦悶を慰さめ奉るべし、

女子手藝案內（二）

刺繡の種類（續）

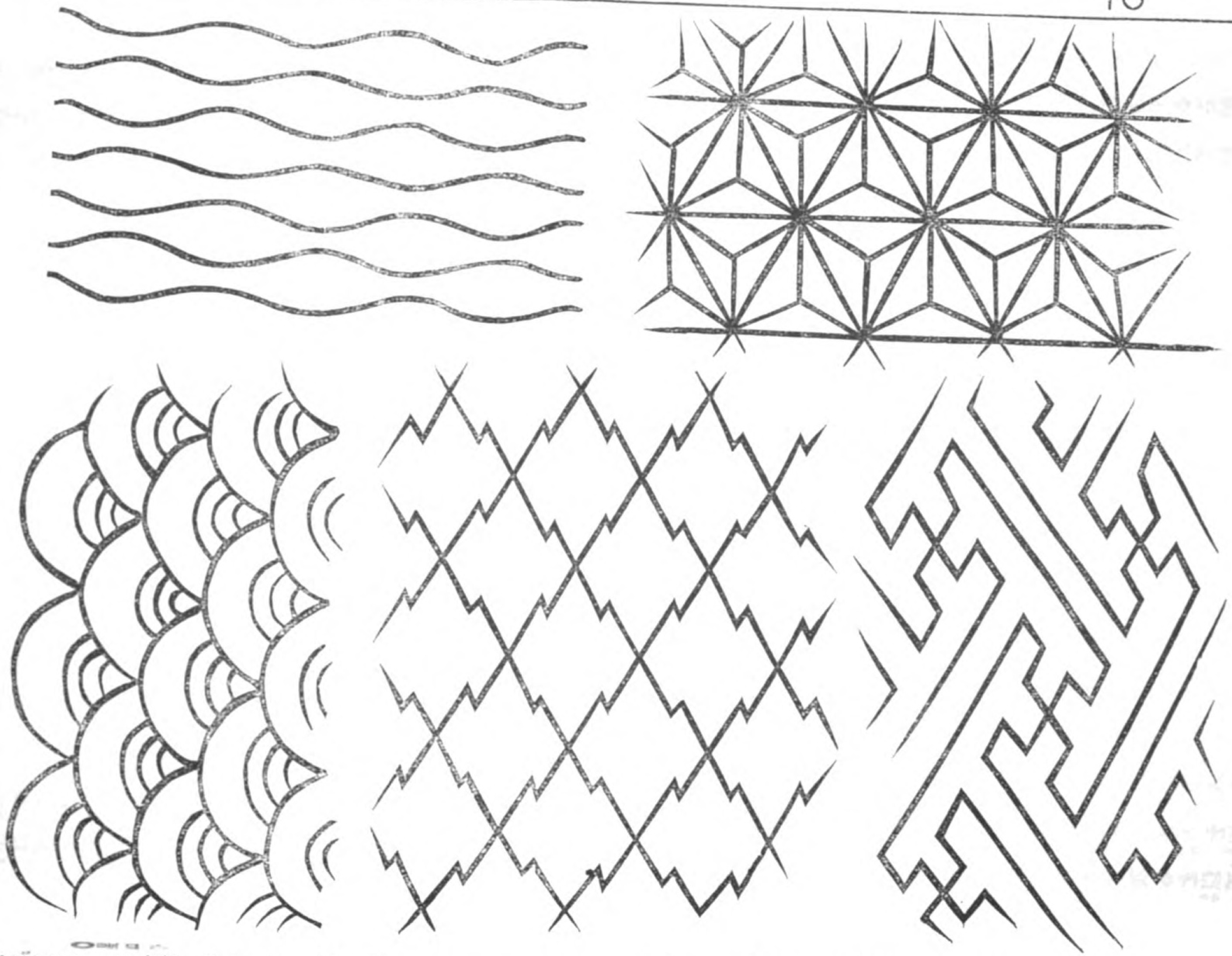
美よしの

○さがらぬひ（一名ゑばぬひ）

其次に陳ぶるものはさがらぬひなり。此ぬひは當時流行のぬひ方にて其方至て容易なり。前者の如く布片を臺に掛け、白粉或は胡粉にて下繪を寫し置き、其上を繡ふに當り一ッ結びて輪を作り切れ地に透して引くときはぶつ〳〵とせし結び目の點出來ぬ、此點にて下繪の如き花紋或は模樣をぬひ出すなり。此ぬひに用ふる糸は勿論綸糸にして糸の綯り方細きときは細微の點となり、太きときは其結び目大となるを以て從て大なるぶつ〳〵出來るなり。花の蕊は大抵此ぬひ方を用ふ。又さがらぬひにて切れ地をぬひつぶし紙入或は煙草入を作ること流行す、地質强固となりて破れ難く一見絽ざしの如し、されどぶつ〳〵を滿面に並べてなりしぬひ地なれば、わらはの如き神經質の者は之を見るときは、總身に粟を生じ何となう心地惡し。例へば鮫の皮膚の如く、或は蛇身の斑紋の如く、持ちし手を思はず放ちて、うち振ひつゝ後すざり爲たき思ひの生ずるをいかにせん。殊に切れ地をぬひつぶすは刺繡法の本意にあらねば、餘り賞めたる流行にあらず。又つぶすと云ふは忌むべき言の葉にも侍れば努め爲まじきことならずやなぞとかつぐもいと可笑。とはいへ半襟、髮飾、のぬひ模樣に小徑の上に降りこぼれたる霰の如く此處彼處にうちまろびたる如くぬひ出したるは愛嬌なきにもあらずかし。概するに此ぬひ方はほつれ難きを以て、數次洗濯するものなぞには最も適するぬひ方なりと知り玉へ。圖に示の所の、たてわく、さやがた、せいがい波、松川菱等は半襟地に適するさがらぬひの下繪なり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

10



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○星ぬひ

星ぬひは名の如く、極て細かに芥子粒を並べたるが如くぽつ〳〵と針目現はに、晴れし夜に星の居並ぶ如くぬふなり。星見るに望遠鏡ほしき心地するが如く、星ぬひ見るには顕微鏡の力からまく欲するやう、至て微かに繍ふを良しとす。故に此ぬひ方は容易きが如くにして容易からず。長時間此ぬひに従事するときは視力衰へ、倦怠を來たす。虚言と思さば三四時間試み玉へよや。

○金糸ぬひ

金糸ぬひはよく人々の知れるぬひ方なり、前の如き法にて下繪を寫し置き、其上に金糸或は銀糸を渡し、ぞべ糸と稱する極て細き絹糸にて其上を壓へるなり、此時用ふるぞべ糸の色は大抵黄或は赤なり、衣裳の模様、服紗の定紋に、此ぬひ方を用ふるは皆人々の知り玉ふが如し。又絹糸と金糸と縒り合せて、刺繍する事あり。黒色の絹糸と金糸と縒り合せて岩をぬひ、緑色の絹糸と金糸と縒り合せて孔雀の尾を繍ふが如き皆其一例なり。金糸ぬひの強固なるとほつれ易きとは、其壓へ方による。壓へるとはほそき糸にて金糸を切れ地にとぢつけるを云ふなり。其とぢつけ方細かきときはほつれ難く、あらく壓へなばほつれ易し。又糸を壓へることは金糸にのみ限るにあらず、平糸ぬひにても長く渡すときは壓へ糸の知れぬやう壓へるなり。其他のぬひ方にても糸をとぢつくる事少からず。

○肉入ぬひ

半襟髪飾手巾紙入類の如く、平にしておちつきたるぬひ方を要するときの外、岩に牡丹、鶴龜の丸、其他華美にして艶麗なる刺繍品は寫生物にまれ、模様ものにまれ、大抵二重三重にぬひ、或は雁皮紙の紙捩をとぢつけ、其上を粗末なる糸にてぬひ、更に其上を望む如き彩糸にてぬひ上ぐるなり。斯くの如く二重三重にぬひ或は紙捩を入れ、綿を入れて厚くぬふを肉入ぬひと云ふ。重服紗、羽子板の刺繍繪、などには殊に多く肉を入るゝものなり。

○此ぬひの可否

わらは此刺繍に多く肉を入れることにつき、時々斯道の人を訪ひ、其意見を問ひしに、斯道の達人と稱すべき有數の人はいざ知らず、先づ平々凡々の刺繍師は可成肉を入れて華麗に

し目に立つやう刺繡せんことを求む。然るに圖案家即意匠家は大抵之を好まず、紅紙や金紙にて作りたる造花は美は即美なれども生氣なく趣味なきをいかにせん。之を同じく肉糸豊に、五彩備り、美麗なる刺繡品は、豊艶富麗華美と稱すべきも、美の神髓たる氣韻雅致に乏しく、美は美なれども眞美にあらず。古代摸模のなつかしきすがたも、肉糸厚く刺繡しさりなば、例へば氣高き美姫のメレンス友染の出で立ちを見るが如く、くやしきふしのみいと多く、不相應しきことと云はん方なかるべし。高雅を慕ひ、優美を愛する圖案家が毎に發する嘆聲は皆此點より出づるぞかし。わらは此二者の中間に立ち調和の勞をとりしこと玆に年あり。されど幸にもわらはが朝夕事を計りし圖案家某の君は、其見廣きこと海洋の如く、彼の世の中にありと聞く行路の難をよく踏み試み賜ひ、對手を鯨呑して何事も意に介し玉はず、忍び難きを忍び、容れ難きを容れ、一意專心技藝の進行をのみ求めらる、益斯道改進の眞果は此君の天資に胚胎して、此君の巧緻に熟し、はや收穫の期の遠からざるを信ず。されど視線を遠近に走せて、斯道が目下の狀況を見るに、斯道の過半は一丁字をも解せざる沒理漢とか稱する人々の手に委ねあるなり。我敬愛なる諸姉よ、若し御涙あらば、斯道の爲めに、我女子實業教育の爲めに、濺ぎ賜へ。噫々憐れ、かゝる人々の暗き心の内に、眞美を認め得る一點の光もがなと、祈らぬ日とてはあらざるものを。

○すがぬひ

極て細き絹糸を縒り、下繪の上に並行して引き渡し、細かく止めてほつれぬやう爲すなり。半襟のぬひは普通此ぬひ方による。雲霞、日の出、なぞは此法によりてぬふこと多し。總て細密のぬひにて、何に用ふるも適せざること少し。

○さしぬひ

此ぬひ方は一針づゝ細かに刺してぬひ行くものなれば、時間を要すること極て多し。されどほつれぬ點に至りてはいづれも此ぬひ方に勝ること能はず。服紗、額面、掛物類に至るまで此法によりてぬひなば損じ難く、代々傳へ得るなり。但し糸は縒糸を用ふるも、平糸を用ふるも苦しからず。

此他ハンケチーフのぬひ方あり、動物の羽毛のぬひ方あり、ハンケチーフは表裏同一にぬふものなれば細密のぬひを

爲すこと能はず。總て絢糸にて表に一針ぬひなば、裏にも其如くぬひ、ぬひ目の長きときはかくしどめをなし、數次洗濯するもほつれぬやう、又色糸を用ふるときは、色褪せしみ出さぬものを撰び用ふること肝要なり。ぼかし染の色糸を用ふることと内外ともに流行すと聞きしが、品位下り好ましからず。洒瀟淡素の彩色却て、心ゆかしき思ひこそすなれ。羽毛の刺しかたは足或は他の一局部の端より始め、次第に糸を重ね 順 逆に注意してぬふべし。

○糊の事

ハンケチーフはぬひ上りたる後、霧をふきて切れのたるみを防せぐか、さなくば湯のしを爲すべし。此ぬひ方を除き他の法にてぬいし物はぬひ上りし後、糸のほつれを止むる爲め、切れの裏面に薄く糊を引き、よく乾かして掛臺よりとりはづすなり。又糊はなるべく少き方宜しく、多きに過ぐるときは、切れ地こはばりていと見にくし、よく〳〵注意し玉ふべし。

ぬひ方の種類は此號にて終りぬ。次號よりは、刺繡用具の種類得失幷におぼつかなくも下繪につきて一言聞え上げんと欲するなり。

ひとりごと

紫琴女

一 婦人の永生

死にたしといふ人にても、其心の底を叩きなば、死にたくなけれど死にたしといふの意味ならむ。まして死を願はざる人の心には、いつまでも生きたしといふ望はもてるものから、とても此儘に不死の壽命は得難しと思ふより、扨は別に永生の道を求むるなれ。されば宗敎家は宗敎家として、學者は學者として、おの〳〵其信ずる所により、永生の法はある可けれど、婦人として永生の道を求むるには、子女に依りて、不滅を計るほど便宜なる事はなし。男子とても遺傳の理に基き、子孫によりて不滅なるを得とはいふものから、婦人の如く、朝夕我手にかけて子女を育つるに非るを以て、敎化の力を加ふる便宜少し。されば、主に遺傳の力を假らではかなはず。ひとり婦人は男子の如く、外に向ひて永生の途を計ると難きかはりには、子女に對して、遺傳の外におのが心のまに〳〵如何やうにも敎化し、感化するを得べき途を與へられ居るな

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

れば、子女を透しての永生は、婦人の喜んで執るべきの道なりと思ふは如何あらむ。さあれ此論らひの我田引水論なりや、あるは又いふ可く問ひ難き事なるかは、なほ再考すべくなむ。

二　夫婦配合の氣質

夫婦は性格似通ひて、技能長所を同うするもの配合よろ敷や。或は又其性格を異にし、技能長所相異なる方よろしかるべくやといふ事は、おの〳〵一利一害ある事にて、容易くは決定を與へ難き事なるべし。されど孰れをかといへば、われは異なる方を採らむとこそ思ふなれ。其を如何にとなれば性格の似通ひたるものは、互に其心を知り合ふこと得易ければ、随ふて同情を寄するとも多けれど、さるかはりには、衝突も亦屡々其間に起るを免れず。殊に性格に就ての長所と短所とは、毎に相伴ふものにしあれば、長所の同じきは双方共に、其長を加ふるの利あるべきも、一度過ちに陷りたらむ時、相助け相補ふとなし難きの虞あるべし。故にわれは消極的には似たれ只其性格の相違して、衝突の憂もなし、且又長短相補ふの利便ある方宜しからむとは思ふなり。技能に於るも亦しかり、人は誰しも己れのなし得ざる事を、人のなさむには、さしたる事にもあらぬ事迄も、太く感服するものなれど己れの得意なる事は、人の容易くなさむにも、さして心を動さぬが習なれば、是も亦技能を異にしたる方宜しからむかと思はる。さはいへ一方よりいへば、其技能を同うする時は、ことばがたきの友としての親み、一層切なる事を得べく、相互の技倆價値のほどをも、明らかに見分くる事を得べきなれば、知らざる事に就て、漠然とした感服を呈するよりも、信認の度餘程高まるべき事と思はるゝものから、是も亦長所の見ゆると同時に、短所も亦眼に付き易きものなれば矢張難波江に繋げる舟の、よしあしの間を免れざる事になむ。兎に角かゝる問題は、さま〴〵なる關係あるを以て、一概には何れをよしと定め難きものゝ、夫婦は他の友とは異なり、相伴ふと久うして、しかも互に遠慮會釋の心失せ易きものにしあれば、假令大なる利はあらずとも、衝突の虞なく、缺點の見え易からぬ方安全ならむと思へるまゝに、われは性格技能共に異なる方をよろしからむかとは思へるなり。殊に子女を擧げし場合に於ては、夫婦の性格技能相異なれる方、子女の上にも

趣多く様異なる遺傳を與へ、敎化の上にも中和を得て、大に都合よからむと思へれど、是も亦如何ある可からむ。未だ俄には断言しがたくなむ。

三　子供の面前にて、子供を譏ること

世間普通の挨拶に、よその子供に對しては、おや〳〵どうもお悧巧な坊ちやんですねとかお大人しいお孃樣ですねとか、必ず譽め詞を呈するものなり。かゝる場合に、子供の母なる人の其傍に在らむには、必らず之れに對して、イエ〳〵どう致し升ていたづら者でしかたがあり升ぬとか、少しも私の申す事を聞升ぬから困り升とか、必らず我子供の事を、悪しざまにいふ事が、一ツの禮儀とはなり居るなり。されどかゝることを、子供の傍にていふ事は、子供をして、悪しき感情を起さしむるものにはあらずや。子供は非常に名譽心の盛んなるものにて、人に譽めらるゝ事を、此上なき榮となし居るものなる事は、さま〳〵の場合に於て、推察することを得るものなり。さるを其名譽心盛んなる子供の傍に於て、子供を譏ることは、如何に子供心にも、心地よからぬ事ならむ。我稚き子の未だ三歳に、満たざるさへ、かゝる場合には、いと怨めしげに、我顔をまもり居るに心付きてより、我はかゝるお世辭を人より聞くことありとも、決してお定りの答へをなさず、只何となく聞流すことなし居るなり。其はかゝる挨拶の、大人同士の虚禮たることを、知り得可くもあらぬ子供の、小さき胸を痛めしめ、果はそら謙遜といふ事を、覺えなむかとての注意なり。父は子の爲にかくし、子は父の爲にかくすていふ事は、今に始めぬ道なるに、子供の此上なく敬慕し、依賴する母の口より、子供の事を悪しさまに人にいひ觸らす事、假令世間普通の挨拶なりとて、ゆめ〳〵子供にきかすべき事にはあらず。

文藝

小説家と同情

（一葉全集を讀む）

鴎村

一葉女史は實に明治文壇の生みたる有數の天才なり。女史の

其才筆を以て廿八九年の文壇に立つや、有髯男子の文才もまた、之を望んで、瞠若たるなき能はざりき。日頃人に許すと少き鷗外氏の如きすら、今日詩人を以て許すべきもの、それたゞ一の一葉女史かと賛し、評眼深酷たる幾多の批評者流も、女史に呈するに、多くの好讃辭を以てせざると能はず。其一朝幽冥を異にするや、文界舉りていたく之を悼戚す、以て女史の天才の如何に世に歡迎せられしかを知るに足る。

此天才、世を蚤くして、文界の損失、甚だ傷むべしと雖も、幸に遺韻の永く人心に響くものありて、一葉全集は世人の愛翫敬重を受くると、必ずや久しきに亘らん。吾人もまた之を愛翫す。女史が苦心慘憺、一字忽諸にせざるの筆にして、四五の年月に於て、廿有三篇の美文を文界に殘せるや、女史の文名を世に傳ふるに當りて、必ずしも、其述製の稀少なるを謌へず。而もたゞ僅に『たけくらべ』の一篇のみを以てするも亦敢て、女史希有の才藻の煥發の乏しきを憂へず。然り廿有三篇の文字いづれも、非凡の才藻を示すものなりと雖も、一葉全集の花實は、『たけくらべ』『濁江』にして、之に次ぐは夫れ『十三夜』『われから』歟。他篇の如き、必ずしも之を通讀せざらんも、此等を以てして、克く女史が天才の希有なるを知るを得べし。

一葉女史を稱して、天才と稱す、然るに此天才は、勞苦勤勉によりて初めて煥發したるの天才なり。其文字を造搆するや彼花圃女史の如く、興趣一たび催せば、千言万語、敢て滋滯することなきの流に非ず。其想を搆へ、其文を綴るに、苦心また苦心を重ね、經營頗る慘澹、女史自ら生業を筆端に托するの勞苦を、不幸として時に嗟嘆することありしとぞ。これ其甚だ勉めたるにも拘らず、僅に十六回より成れる『たけくらべ』の爲めにも、殆ど一歲月の日子を要し、其名既に稱せられて、而も作品甚だ多からざる所以歟。然りと雖も、其學殖の素養を以てすれば、多くの女流文才にして、一葉女史の右に出づるもの尠からず、靑年作家にして、よく其師たり得べきもの多きにも拘らず、女史の克く彼等を壓して、其文名を成し、廿九年の文壇に名づくるに、一葉時代の稱を以てせしめんとするの勢力となりしは、實に、女史が非凡の天才の所爲たらずんばあらず。

女史の天才や、正に非凡を以て稱すべし、然りと雖も、吾人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は必ずしも、一葉全集中、遺憾なく吾人を滿足せしめ得べきの、絶妙の作品ありと許す能はず。されど紅葉露伴は、暫くいはず、他の頻々たる文才の未だ企及し能はざるの異彩は、自ら其中に煥發して、一葉の長處歴々として其邊に存す。女史の特長果して那邊にか在る。其措辭文章の妙か、西鶴を精讀し、紅葉露伴を精讀し、精錬の筆、婉麗玉を成し、多く得難きの文字なり。然れども是れ未だ吾人の女史に於て、最も見るべしとなす所以に非ず。然らば結構創案の妙か、女史の小說や、其結構概ね單純にして、奇想なく、妙變なし、否女史自ら結構の爲めに、甚だ其拙劣なるを歎じたるなり。新聞の雜報を熟讀し、事實譚に傾聽し、創案の爲めに勞して、而して其描く處の人物は、一々之が摸型を實際の見聞に採れり。概するに結構の妙致より見れば、女史は到底、青年新進の作家にだも勝ると能はざりけん。故に女史をしてもし百年の壽あらしめんも、或は奇想妙趣を搆へたる長篇大作の述作を望むと能はざりしならん。然りと雖も、小說の短篇なると、其結構の單純なるとは必ずしも作者の拙劣なる所以に非ず。弦齋は紅葉の上に出でず、馬琴は西鶴に勝らず、西鶴の小說の如きは、結構頗る單純なるを以て稱すべきも、其靈活の筆を以て描寫する處、人物躍々として活動す。一葉女史の如きも女性の綿密なる眼光を以て其模型を求めて、人物の活寫に苦辛し、而して其妙麗の文章となる處、人物皆活動するに邇し。此邊の妙趣女史に於て甚だ稱すべし。されど吾人は猶未だ、之を以て女史の特長と認めず。然らば其者は何ぞや、吾人は女史の小說を繙いて、描かれたる篇中の人物の、女史が女性として有せる、涙に脆く、哀みに深く、思ひやりに厚き、同情の念の横溢せる餘に成りたるを觀得せずんばあらず。此同情の念、これぞ即ち、女史が其小說に於て成功したる所以にして、また明治文壇に傑出したる所以なりとす。其小說の人物の徒に死物奇物に了らずして、活氣生命あらしめ得たる所以のもの、此同情の念の力にあること最も多しとす。

今の多くの小說家、其想や奇に、其文や妙に、而も精を之に勞して、甚だ勗む。然るに彼等の作品の多くは人を動かすに足るとなくして、假構の人物、死物に了らざるもの至りて稀れなり。蓋し如斯きは、作家の苦心の、奇想妙文の爲めに小說を編み出さんとする邊に留まりて、自ら假構する人物の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

爲めに、同情の念々を寄すると殆ど無きを以てなり。故に失敬の一語を以て人を殺すとを描きし某作家の如きさへあるに至る。鏡花柳浪の一派は、構文の深刻なるを以て稱せられ、心機轉變の妙趣を描くに長ずるを以て名あり。如今彼等の文名は嘖々として囂し。然るに吾人は彼等の小說を讀んで、甚だ滿足すると能はず。素より最初の程は、其奇想を喜ぶことありと雖も、殆ど同趣の作品續々として現れ出づるに至りては、吾人は既に彼等に飽きて、鏡花柳浪の一派は、人殺しの好きなる小說家なりとの惡口を吐かんとす。彼等の筆は深刻なり、然れども單に深刻を弄して、世の嗜好に投ぜんとするものに非ざるか。吾人は未だ彼等に於て、不言不語の間に、大なる同情を作中の人物に寄せ、之が爲めに涙を濺ぐことあるを認むること能はざるは、抑も吾人が觀察の淺薄によるか。啻に柳浪一派の深刻的小說家のみならず、滔々たる小說家、其筆を同情の爲めに動かすもの甚だ稀れなり。素より往々にして、殊更に辯を弄して、惱めるもの、苦しめるものゝ爲めに、同情を寄するが如きものありと雖も、如斯きも、其實、無限大の同情、自らの胸間に發露するとなきが如し。此時に當りて、女性に通有なる多量の同情を以て、其小說を編の一葉女史、出づることあり、女史の文名を成す所以のもの豈に偶然ならんや。お力といひ、お美代といひ、お町といひ、みどりといひ、お關といひ、女史は此等の人物を描くに、厚き同情の念を以てして、而して同情の念の最も大に傾注せられたるものほど、最もよく成功せり。一葉は由來、同情の念に厚き一女性、而してよく其同情を、其小說の爲めに傾けたるが爲めに、頗る成功して、紅葉露伴と雖も、爰に於て、一葉女史に劣ることなき能はず。

一葉女史の筆には、同情の念充溢せり、これ實に吾人が、女史に於て、最も重んずる所以にして、されば今一葉全集を繙くに當りて、此特長に加ふるに、彼妙文を以てせる女史をして、尙幾年の壽を得せしめて、廣く社會を觀察せしめ、以て其筆に健ならしめなば、一葉全集の價値、啻に今日の如きにして止まらざりけん。殊に女史をして、其眼を、狹斜鄙淫の社會より擧げて、高尙純潔なる社會に上せ、且つや宗教的熱誠に充たしむるとありたりけんには、女史の文名は、天下の耀となりて、我文壇亦大に刷新する所ありたりけんに、之

を思ふて、女史の逝くを傷み、また文界の爲に嘆ず、

和歌

池袋清風

山家梅

山ざとのかけひの水の末見ればうめの林にかくれけるかな

おぼろ夜の梅の林の花ざかりかけひの水のおとぞふけゆく

水邊梅

汲みあげしつるべの水にうつりけり古井のはたの梅の初花

夕梅

夕月のかげなつかしくなりにけり垣根の梅のさきそめしより

朝鮮政府

定めなきこま野の時雨ともすればやまと島根にかゝりける哉

輕業師

うつせみの世渡りよりも綱わたりなか〳〵やすき心なるらむ

深夜感

燈火もかすかになりて更にけり千々の思ひはもえまさりつゝ

巖本嘉志子の身まかりし時の事をきゝて

たらちねの永き別れも知らずして笑めるうなゐの哀れなる哉

故里へ歸る道よりよめる歌　大竹英子

故里はまだ遠けれどあふきみるそらなつかしく成りにける哉

木枯

うたゝねに夜や更ぬらん木枯の音のいよ〳〵冴まさりつゝ

汽車

夢のよに千里をかけてまがれちを走る車のいさましき哉

赤城山

ものゝふのたけき心もあらはれて山のすがたの動きなきかな

樵路紅葉

谷川のながれにそひし北山のもみぢぞことにみあかざりけり

北越鐵道

開け行よはみこしぢもくろがねの道いやしげく成まさりけり

皇太后陛下の御喪に　兒嶋櫻子

この春は春としもなくうちしめり袖しほたれぬ人もなきかな

門ごとに黑くもおほひ照る光かりくれにしけふをなげく頃かな

新年松　林うた子

新玉の年の初めはさきはぎの松のみどりもめづらしきかな

梅花述懷

鶯の初音もまだで咲く梅の花の心をこゝろともがな

母上の手織の衣着たる嬉しさを

たらちねのあつき恵みの手織衣かさぬる身こそいとゞ幸なれ

松影映水

水の面にうつるは千代の影なれやちぎり久しき相生の松

羈旅懐古

草に木にその古への忍ばれておく白露の玉ぞみだるゝ

四條畷懐古

あづさ弓ひきてかへらぬまごゝろを忍ぶにあまる野邊の白露

新年霞　　　　尼道　亀山利子

さし波はたちかへりぬさうぐひすも霞のふるすを今か出らん

友垣の都にのぼる折ふし

忘るなよ都の花はかざすとも袖ふる里の秋のにしきを

史傳

史料散錄（二）

如雲

◎水野越前が苛酷なる仕置をもて、一切の奢りを禁制したる頃、諸家のお留守居が茶屋に上りて酒くみ交はす肴を見れば、そのかみの豪奢は悉皆止めて、膳に出でたるは三葉の漬物なり。お上の法度は能くも行届きしもの哉と嘆ずる人もありつらんが、何んぞ知らん、此の三葉は温室づくりのハシリにて、其價、珍魚佳肴にも優りたるとぞ。又其頃、或る家に蒲ぼこ二枚、餅菓子三つを贈り越したり。如何にも質素の贈品にて、お上の御主意に順従せし如くなりしが、後に仔細に聞けば、此の蒲ぼこは鳩の胸の肉を集めて製したるものゆゑ、凡そ其一枚を造るに鳩數十羽を用ひたり。又、餅菓子は、蕎麥粉をふるひ、其粉の飛び上りて天井に置いたる木に附着せし極細の粉計りを集めたるものにて製したり。左れば、此の二品にて價は十數兩に上りしものなりしとぞ。凡そ政治を以て社會を制せんとする時は、實況大抵如此し。

◎幕府の末、牢を明けて一時に罪人を解放したるとあり。中には恐ろしき重罪の者もありき。一婦人、七人の夫を謀殺せしと云ふものありき。然るに、俄然解放せられて宛ら毒氣を抜かれし如く、出獄の後、再び重罪を犯せしとは餘り聞かざりき。總べて解放は突然なるが宜し、天外落下の殊恩によりて恵澤を施こしたるものは、大抵は再たび犯罪するとなし。犯す者は只だコセ〳〵泥棒の類なり。

◎天璋院殿と和宮様との御仲合ひの事は、前にも掲げし如く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なるが、之に付き或る翁の曰く、元來お二方が最初の程、睦ましからず居ませしと云ふは、必竟、お附の人々の誤解より出でしとなり。初め、和宮樣御降嫁の折、御土産を院へ持參せられて、包紙に『天璋院へ』と認ためたり。如何に上樣よりの御降嫁なりとも、既に德川氏へ御出ありし上は、院は姑なり、天璋院へと御書ずての法やあらんと密かに不平を鳴らせしものゝありし由。總べて上つ方の御仲合は、お附の人々の取なしなれば、最初に斯の一事件ありてより、甚だしく行違ひ、折角の御聰明の互ひに通ぜずして、詮なき風評のみ世に聞えたるが、或る時、此の翁の許に御二方を請じ御もてなしを申上しとあり。其時、配膳式の如く出でたる後、天璋院殿親から起ちて、宮の御給仕を爲さんとせられしかば、宮は決して聽き玉はず、此方よりこそ申上べし、左樣の法の候はんやと毫しも從がひ玉はず、彼此と長き押問答のありて一座の興も覺め、人々手の着け樣もなかりしとぞ。其時、翁は男子なれば、別室に扣へ居たるが、此由を聞きて罷り出で、仔細に承りて一笑し、左樣の事に候はゞ好き方の候、斯く遊はすぞ宜しからめとて、二つの櫃を出し、各一つを御二方の傍に捧げて、宮は院に給仕せられ、院は宮に給仕せられて然る可く候半と申せしかば、一座打興じ、歸りにはお二方同車にて親しく物語りあり、此時よりこそ非常の御仲合となりて、何事もすべて第一に御相談あらせらるるほどとなりしとぞ。

◎女同士の騷ぎには、其裏に男子あり。男子仲間の騷ぎには裏に女の關係せざるものなし。故に、小はお家騷動より、大は政治上の黨爭に至る迄、すべて全く女性の關はりなしと云ふはあらず、但だ其の形を現すと顯さゞるとの相違ある耳。茲に、維新前の例につきて、其一つ二つを示さんか、先づ、水戶家の運動、又は月照、西鄕などの仕事に關係せし近衞家の老女村岡あり。安政五年九月、同人が押込られし時のお上よりの申渡に云く、

其方義兼て主家へ館入致す清水成就院隱居忍向引付を以て水戶殿家來鵜飼吉右衞門悴幸吉へ致面會候節同人義水戶前中納言殿其外御愼御隱居等被仰出候次第を相歎き主家御取持を以右御方々御愼解相成候樣致度致內願置候間猶取成の儀相願旨申聞るならば如何の儀と心附取合申間敷處其儀無之幸吉申聞次第主家へ申立又右一條に付幸吉より忍向への

内狀其方に向て指越候間主家へ取次指出可申旨幸吉願承受過て同人方より上書小札其方宛にて岩波と認有之文通差越候を請取右に入有之忍向變名月照宛の文通を同人罷越候節相違又其主家へ取次指出始末幸吉へ馴合候筋に無之共右始末不埒に付押込申付。

◎大老井伊掃部頭の寵臣長野主馬に愛妾あり、元と鴨東の妓なりしが、頗ぶる美にして才敏、其初め尙ほ妓たりし時にや、堂上方に召されて御酒宴などの折は九條殿にも出たりし由、其後長野の妾となりてより尙屢ば御館に參り御意に叶ひしにや大小の機密さへ申出づることとなりしと云ふ。大老奇禍に罹りし後も、彼は猶ほ公武の間にありて專ら機密にあづかりしとぞ申す。

◎安政五年八月、間部下總守上京、條約勅許を乞ふの運動あり長野主馬、島田左近、陰に陽に助力せし折柄、或人の風聞記に云く、

八月七日三公出仕の評議にて殿下御出席無之に付傳奏衆を以御書下けの趣彼仰遣候處叻○の上御挨拶可申上御答にて直に決し衆無據其段及　言上候處夫にては間に合ひ

不申候故直に關東へ差下に付心得拜見候樣に被仰出亦其後御達に相成其間　主上入御相成候處官女の內に讃岐と申者掃部頭內　奏の書差上候其書　姫君御殿向御造營等の儀幷　御思召附の儀は何にても可奉伺外夷の儀は御任せ被成候樣且又三家押込の儀は　將軍家病根一橋公より銘酒獻上右を召上り俄に惱煩相發候て御他界の由右一條三家共申合候儀にて愼申付候旨言上の書中に有之右內奏書の出處は彥根の舊妾ときと申者北野松園坊に借宅當時九條家へ通勤に召出其前幼年の節讃岐方に奉公致し候儀有之右手續にてときより讃岐方へ內々持參候由義言（長野）九條家へ十分手の廻り候も內に此婦あり表に島田あり故を以て不至と云ふ處無之由

主上は右內　奏　御覽の上直に官女に被命當人口書爲取御持參列座の三公始へ御物語御座候由夫より夜九つ時頃九條家への御使も漸御受申上候旨　言上相濟翌八日水戶鵜飼幸吉傳奏へ御呼出の上三家始列藩への　勅書は水戶中納言殿へ御下けに相成御同家より相達可申旨の事に候幕府へ一同に向け候ては秘し可申哉と御懸念の事に成申

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

候鵜飼幸吉直に出立の處亦々德大寺より少々扣候樣との事にて相待居候處夕刻近衞殿より早々出立候樣御達書即刻出立‥‥東海道相下る積の處九日殿下參內前日に相違勅書の趣特に賞贊申上即日御出仕の處又々何か故障有之十日頃出候樣に相成同日夕刻出立云々

問答

○難める友の爲に問ふ

田舍一女子

小女は或る田舍に住める貴雜誌愛讀者の一人に御座候小女の友に世の風波の荒きを不知獅子狼のねらへるも不悟己が愛の高潔なる如く人も亦その如しと思ひ快活の才子世の所謂女殺の口車に乘せられて己の生涯を不運非運に陷れ苦痛に終るを不知輕薄男子の爲めに愛情を玩弄せられあまつさへ暫時にして或る豪家の令孃と見替へられ厭き棄てられて今は日夜熱淚を呑みつゝ痛苦の時を送り居り候而して一方に於ては思はぬ人に嫁がん事を迫まられ心緒亂麻の如く絕躰絕命の運實に氣の毒なる場合に出會はれ候其人小女に話さるゝ樣私はもと己の足らはぬよりして彼人に欺かれ再び世に立たん望みもなしたとへ玩弄せられ厭き棄てられ彼方よりは妾に向ひて一點の愛はなくとも私の彼君を愛したるは只一時の浮れ心に非ずたとひ己の情弱くして過ちに陷りしとも妾が心は既に捧げたり復び他に思はん事なく又思ふ事も出來ず假令世の人のもの笑ひとなるとも今更他に嫁ぐ事を得んや妾の足らはぬ故に親にまで物思はする罪の恐しさ誠にこれは不孝の極み相濟み不申候へ共心の許さぬ事は一致致されずと申され候今記者に御尋ね申候はかゝる場合にたとへ厭き棄てられても先方の心は兎も角も己は一旦心を献げたれば云々

○答

此は寧ろ私書にて御答したく公開の記事を好まざるなれど、切迫の語氣ありて而も名處なく、僅に近江草津の消印ある計りなれば如何とも爲がたく、已むを得ず左に答へ參らす。情に於て應ずるは別事となし、玆に明かに理義に於ての處置を答述すれば、其女史現在の心緒を篤と結束し、嚴に覺悟して三段三樣の分別を立てられんとを專要とす。第一には、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

悔悟、厭忌なり。仔細に反省して彼の痴心を脫却せられなば、過去の行爲の頗ぶる當を失し操を傷つけたるとに氣付き、翻然悟覺して眞に之を悔むの情を惹起さるゝなるべし。既に此情ありて斷乎として他の輕薄男子を視るとあらば、何んぞ其の醜に堪へん、復たび愛思の念なかる可きや必定なり。憫れむは寧ろ可なり、此時亦何の暇ありてか依然之を重んずるに足らんや。須らく儼然として叱斥し去るべし。

●第二には、此の碎けたる心、此の破れたる情を提さげて、何の處の純白の男子を汚さんやと思へ。腐骨を投じて大丈夫の一生を傷つけんとはする乎。

●第三には、貞愛なく、清操なき婚儀の頗ぶる不當、無禮、非義なるとを知り、現在の吾心果して人に嫁するに足るものなる乎を省りみよ。

之を要するに、初は大に悔むべき也。中は敬しんで懼るべき也。後は深く慮るべき也。一は、過去の吾身の爲にす。二は、世間の丈夫の爲にす。三は、凡そ婚姻なるものゝ神聖の爲にす。若し此の三條の分別を嚴明して、各自肅然として思ひ、煩悶雜疑を截斷して、箇々に靈明の覺醒を爲さば、忽然癡頓を脫して當然の正路に出で、正に無垢の處女に復して當然の最初に立反へるとを覺ゆべし。此時に及んで、父母の命を畏こみ、吾が婦德を重んじ、正さしく時處位の適宜を慮るときは、則ち中にして違はざるの判決を自己が照々明々の中に大悟するとを得ん。

講義

炭と薪

（附、門馬夫人の炭薪商）

曲浦子

太古に當りて、燧人氏なるものあり、火を鑽りて、民に火食する由を敎へたりとは、支那の昔話りであるが、さる由來は兎に角に、人間は幾千万年以前の祖先の時代より、薪炭二つの燃料は、其生活に欠ぐべからざるものとなつて居るが扨て此炭と薪とです。我々日々の入用であるが、薪炭商から買入れさへすれば、好い事と濟ましてをるも、是が製造から、製

造地、用ゐ方、燃料理學など、それ〵研究して見るは、家政學上の一要用なる問題にてあるなり。

○炭の製造、名産地(佐倉炭の由來)

炭の製造に用ゐる材木は、櫟、樫、椚を第一とし、楢、柞、松、樅、また其他の雜木をも燒く。之を燒くには、石竈、土竈を用ゐて、石竈のはカタズミ、土竈のはドガマと稱す。燒き方は、竈の中に、鐵器ありて、其上に、材木をひし〵と並べて、下に松薪を燒きて、いはゞ蒸燒にするなり。炭もと人間の生活になくてならぬもの故、何處の國に行きても、材木多き山中にて、山賤が之を燒き、炭竈の煙などゝいひて、昔から風流の歌にも詠まれてあるが、炭燒自身は、顏も手も眞黑にして、まさか風流事ではなし。さて何國の山中でも炭は燒くが、運輸の便と都近い處とで出來るのが、名高くなつてゐて、古來山城國鞍馬山、並に小野の里より出るが最も聞えてゐたり。また攝津池田の產、これも名高し、丹波の土倉產も稱せらる。今日東京市中にて用ゐらるゝ炭は、紀州、伊豆、常陸、兩總、房州より產するもの多く、下總佐倉より出づるものは、特に佐倉炭の名があつて、尊ばるゝなり。河內國光

瀧より出づるものは白炭または細炭といひて、躑躅の木を燒きたるものゝよしにて、是は茶の湯に專ら用ゐる、上等の品なり。

佐倉炭の本場は前にいへるが如くに、下總の佐倉で、此炭を燒き始めたは、昔下總國小金原なる處の廣大なる椚林は、徒に蔓蘿の蔓延する處となりて、たゞ僅計、近傍村落薪木の料になり居りしも、斧だに入らぬ處數里にも餘りて、誰も之を利用する途を知るなかりしに、同國印幡郡富塚村なる處に、川上右仲と云へる人がありて、寬政五年に有司に請願して、此椚林輪伐の許可を得、相州より炭燒を招きて、初めて佐倉炭なるものを製造し出し、遂に名譽ある產物となしたるもの也。佐倉炭は茶の湯または火鉢の留火などに用ゐるが、專らにて、其長所は、柔かくして、其中に緊りの有る處に在るにて、方今伊豆邊よりも、之に似たる炭を燒き出だせども、何分燒様が堅いので、迚も本場物に匹敵せずとのとなり。

○薪の伐り時

薪の材料も、炭に似て、樫、椚をば上等品とし、其他の雜木

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

之に次ぐ。松薪は、通常人家に用ゐるには損なれば、大く割りて、大ざッぱいなる用向、假令ば洗湯をわかし、酒を造る時などに使ふなり。薪を切るには、木に水分の少くなつたる時分、即ち木の葉の落ちたる節に伐るものにて、十一月頃、田の刈入れの濟んだる後より、伐木を始むるなり。府下の薪炭業者は、一二月の頃から始めて、山より送り出す、また生々しい、新刈を買込み置きて、手許にて枯らしたる後、賣り出すなり。其新刈を乾かすには、日光風雨に曝らされない處にて、所謂陰干に志たるが上等にて、あまりに日光風雨に打任かせて枯したのは、燃料としては持ちが悪くて、損なりといふ。また山より切り出したる儘の薪は、大割にしてあつて薪屋にては、之を用に適するやう、更に細かく割りて、元の一把を二把三把に括り直して賣るなり。東京の薪は常陸あたりのもの多し。

○炭と薪との使ひ分け

今日改良竈などいふもの發明せられて、之を使用する家にては、主に炭を用ゐて、薪を用ゐず、其方が徳用向の樣に思はれて居るかなれど、實際は、家を燻らせぬ事に利はあれど

も、小家内の家などにては、餘り徳用向でなく、矢張り薪を使用するが割方に好しとぞ。さる場合にては、よく勘定して見れば、一圓の炭の入用の處に、一圓の薪は入らぬとの事なり。志かし、一日に五六把宛位も薪を使用する家などならば、炭を用ゐて、其處で、燒き殘りをよく仕末すれば、其方が徳用なるべし。學校、會社、官省などの樣に、澤山に火を要する處にては、いづれも炭のみを用ゐるは、もと〳〵經濟向なるが故なり。

炭でも薪でも上等の品を使ふに利方あり。炭の極上品を使用する處は、鰻屋、料理屋、西洋洗濯屋などにて、今日の相場にて、一俵八九十錢より、一圓位の品を使用するは、上等の品程、立ち消えせず、持がよくて、火力の強い故にて、牛肉屋などにても、良き炭を用ゐる店の、牛肉は、よく煮えて軟かなれど、炭悪しき時には、硬く煮ゆとぞ。鰻を燒くには軟くて、多く焦さぬが大事なれば、火力の強くて、ポス〳〵と燃えぬ上等炭を要す。而して炭を用ゐるとの多き、商賈には、また此方が徳用なのである。されば通常人の家にても、一俵三十五錢の炭を一月に五俵使ふ處へ、それと同じ價にて、一俵五十錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の炭を三俵半の方が損の樣に見えて却て使ひ出があり、早い話が客間の火鉢で經驗して見るに、安い炭を留めれば一人の客で消えて仕舞ふ處へ、夫と同じ量で高い炭なら二人目のお客にも務められる。それにまた良き炭だと、屑の少ないにも利があり。また一圓に二十五把の薪よりか、同二十把の方が德用にて、それに掛目の少いカラ〳〵とした薪は槪して損なり。此邊の經濟向は、主婦たるもの〻、よく〳〵考へて、經驗を積み、德用利方のあるを採ることに、油斷すべからず。家政經濟のコツは、この樣な處に、大に存するものぞ。

○燃料理學

扨て以上聊か實際向きからして炭と薪との事を述べたが、此度は、少しく理屈に亘りて、燃料に就きて研究したる理學の大體を、かい抓んで話さん。

空氣の成立つ最も肝腎なる二原素は、酸素と窒素とであつて、酸素は、火を燃やすもの、窒素は火を消すものであり、而して又薪、炭、及び石炭などの燃料が成立つ重の原素は酸素と水素と炭素とで、此中の酸素は、燃料自身の爲めに何の要にも立たず、それに必要なるは、即ち水素と炭素との二原素にて、酸素の多量なる燃料は、即ち下等の品なり。燃料の大部分を形成するものは、炭素で、これが抑も燃料をして其效用を果たさしむるものである。酸素水素は、別々に遊離すれば、單に流動する瓦斯で、如何な化學者でも、此等の元素を液體または固形體にすることは出來ない。之に反して炭素は固形體で、之を氣體、液體に流動せしむることは出來ぬ。それ故に、熱が加はつて、燃料中の他の原素は、それ〳〵遊離しても、炭素の部分は依然として、其形を存して、これが即ち火塊のある所以なり。

燃料中なる水素の效用は、これが燃ゆる時には炭素に優る三倍の熱度を有してをる位で、火力の爲めには必要なり。また焰なるものは、即ち燃料中の水素が、熱に會ふて遊離しながら、元來極めて重量の輕きもの故、燃えつ〻上昇するから生ずるなり。扨て又火の燃ゆる節、酸素が直に燃料中の水素と炭素とに化合して、一方には水となり、また一方には炭酸瓦斯を生ずるものでなく、熱が一度燃料に加はれば、其原素は一旦分解して、また別なる種々の抱合物となり、それと酸素とが化合して、燃えるものは燃え、炭酸瓦斯となるものは、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

それに成るなり。火燃ゆる時、酸素は悉く、燃料中の燃ゆべき分子を燃やすかといふに、それまでには行かぬを以て、即ち煙なるものが生ずるなり。

薪や炭には、軟いと硬いとのあるは、焼き様、乾かし様にもよれど一躰地味の肥えた處や、風の強く當らない森林などに生じたる木は、苦勞が少い故に、木目が詰まず、随て軟く、之に反して痩た風當りの強い土地に苦勞した木は、硬く、海近より出づる薪炭は、一躰に硬くて徳用なりといふ。軟かい燃料は、最初は勢よくボス〳〵と燃えて、多少の炭素は水素に持ち去られて遊離し、それで焔も煙も多量であつて、火力は長持ちせず。志かし軟き燃料は、必ずしも硬い燃料よりも火力が弱いとはいへず、たゞ早く燃えて、長持せねば一時に早く短く熱を加へんとするものゝ場合には、軟かき方を要するとあり。鍛冶屋に用ゐる炭は、樅を焼きたる軟き品なるが、之を用ゐる理由は、早く銅鐵に熱を加へて、志かして溶かさぬ様にするが爲なり。

また水氣の多い燃料は、燃えが遅いのみならず、水分の蒸發の爲めに、火の熱度を減少することになるなり。故にドカマ炭などに水を多く灑ぎかけるは、つまり經濟にてなく、堅炭の上品なれば、中まで水の泌み込むものでなければ、燃え方の違ひも殆どなし。但し炭には多少水を注ぐべき譯は、炭の粉を流し落す故に、取扱に稍や奇麗にもあり、また持ちの上からにも、多少の利はあるべきなり。

材木を焼きて炭となすに、出來上りの量は、原料の百分の十五乃至二十五位にて、早く焼き上げたる炭ほど、此割合が少きなり。故に土竈石竈の別も、材料の別もあるべきふなれど、もと〳〵、焼くべき炭に、熱を充分に加ふると否とに在るべく、また炭竈の煙出しの穴の大なるは、炭軟く、其小きは硬しといふも、此邊の理由によるか。

今又種々なる燃料の熱度を志らぶるに、氷をば沸騰せしめて見て、比較するに、其七十三磅に、炭一磅、六十磅に石炭一磅、三十五磅に薪一磅を要する割合なるよし。志かしこれは理學的の精密なる試驗の上の勘定であれば、通常にては、燃料の當用が、之とは餘計な入目となるべきなり。また燃料を燃すに要する空氣の量は、燃料の量よりも甚だ澤山に要するものにて、炭一磅には空氣百五十立方呎、石炭一磅には空氣

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

百二十立方呎、薪一磅には空氣七十五立方呎を要する譯のよしなるが、是も亦理學上の試驗成績にて、實際にては、空氣の需用の、この勘定よりは、ずつと增加するなり。去かして又空氣の餘り多き時は、却て燃料を冷かして、火の燃え難い事になるものなり。

○門馬夫人の薪炭商

炭薪の講義をなし來つて、爰で是非共思ひ起すは、近頃此商業に從事せる一賢夫人の話である。其人の事は即ち昨年末つ方の府下諸新聞に、一美談として載せられてあつたる門馬尚經氏夫人よし子氏なり。記者一日夫人をば、芝愛宕町二丁目なる其薪炭店に訪問して、樣々薪炭の事に就きて、益を受け、なほまた此業を營まれし以來の經驗談を聞きたり。一見するにも夫人の心根の程の慕はしきものから、何となくゆかしく感ぜられ、炭の爲めに、手の如きは眞黑に染まりて、如何に洗ひても落ちずと聞くに、其勞苦の程の察せらるゝに餘りあり。夫人がかゝる商業を營まれし由來は、夫尚經氏は進步黨員として、政界に奔走し、屢代議士撰擧の競爭をもなして、家產を營むの隙なく、加ふるに、肺病に罹られしより、夫人は夫の腕に縋りたのむ事なく、自ら奮つて家產を興し、夫をして內顧の憂なからしめんものと決心し、それ故資本の殆ど無かりしにもかまはず、薪炭商を企て、自身伊豆の山中に赴きて、炭の竈元と取引をなし、恁て一戶の店を構へたり。初めの程は下男をも置かず、自ら炭を擔いで得意廻りをなしたりと。下男を雇ひ入れても屢金錢を持ち逃げせられ、初めは人に冷かさるゝが何よりつらく、料理屋の若い者、官省の小使などに、貴樣などゝ呼び捨てにせらるゝが悲しく、廢業せんかと思ひしことも幾度か、其塲合を怺へ凌ぎて、二年の經驗を重ねたる今日、店の土臺も漸く据りたるも、夫人は少しも心を弛めず問屋との取引より、得意廻りより、着荷の仕末より薪を割ることまで、自らすてふ其氣象の並々ならぬは、實に感ずるに餘りあり、夫人の如きは、必ずや斯業に於て、大なる成効を奏し得らるゝ事と思ふ。夫人の志に感じて、力を假さんといふものもあり、また購買を申込む向も多しとか、さもあるべき筈なり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雑録

村夫子

とよ子

村夫子といふもの、如何なる村にも、一人二人はあり度ものなり。其も昔ながらの村夫子にはあらで、今の世今の時に相應しき智識もて、村人を教へ導くがあらまほしきなり。人文は開けぬ、人智は進みぬ、今の日本は、昔しの日本にはあらじなど人毎にいふめれど、其はおしなべての人の上にこそいはゞいふべけれ。今の京にも田舎はあるものを、爭で田舎に、昔の田舎のなからめや。遉も明治の人にやと、訝らるゝが東京の町にもありと聞ゆれば、田舎人の今の世に似合しからぬが多きも怪しうはあらじ。東京には知事様よりもえらき人澤山ありといへば、眼を圓らにして呆るゝ人、西洋といへば、唐天竺よりも遠しと聞きて、其は眞實にかと訝る人、強ちに五十路六十路の人とは限らず。廿歳あまり明治の教育を、受けたりと覺しき男子が然なれば、况して其他の人々をや。されどかゝる事はさして要なき事といはゞいはめ、おしなべて迷信の行はるゝ、兒等を學校へやらぬをば、別に心苦しき事とも思はぬなどのありさまは、見るからに慨はしき事の限なり。我知れるあたりのみにても、身にかへてもと思ふいとし子の、輕からぬ病に罹れる、將た年老いたるたらちねの、明日志らぬ枕に就きたるなどを、怪しの加持祈禱にのみ頼みをかけて、絶て醫師を招かず。たまたま人の勸むるがありても、折角神佛に祈りつるものを、今將た醫師の手に委ねなば、頼みまつりし神佛の祟ありとて、なかなか聞入べくもあらず。あやしのお神水とかいへるもの、あるは小やかなる鏡餅のせんじ汁なんどを、此上なきものに思て飲ませつ。日を經て驗なきは、家内に不信人なるもののあるが爲なりなんどいふ、祈禱者がそゞろなる詞を信じて、果は親子夫婦、兄弟姉妹の間に、あらぬ疑を生じて、喧嘩を惹起すなどのためし珍らしからず。こときれての後始めて醫師を招くも、はや施すべき術なきなど憐はれなる沙汰彼處此處に聞ゆ。さるは年老たる人の、心の迷ひより、さはさせつるにやと聞くに、三十路にも足らぬ家の主の、心よりせし業なりといふにぞ、明

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

沿の人もこゝらあたりのはなか〳〵に頼みなき心地す。其外さして貧しといふ家の子にもあらぬが、父母の書物を購ひ玉はぬ故、學校へは得ゆかでといふがあれば、壊れたる行厨、調へ玉む迄は、今日も明日も休まなむといと嬉しげにいふ見等の顏見るからに痛ましゝ。

かゝる類を擧げもてゆかば、數限りなき事にしあれば、我は心ある人の村夫子とも、村女史ともなりて、田舍人の群に交り、日頃は彼人達の、心置なき友ともなりつ、折に觸れ物にかこつけて、其が蒙を啓き、智を硏かしむるの師ともなり玉はむには、事さゝやかなるに似て、世の爲め人の爲め、なかなかに益する事なりと思ふなり。さるは浮華なる影を遊びて、都の空に、夢の浮世と消さむより、なんぼう貴き生涯なるべき。さはいへ青雲の望切なる、若き殿原姫達に、かゝる事聞えむは、餘りに理なき願には似つるものから、ものめづらしき身には、見ると聞と、思の外なる心地のみして、爭でと思ふ心止み難き故にこそ。責て願はしきは、地方よりいでゝ都に學び玉ふ殿原姫達よ、年毎の夏を、水清く山深きあたりに送り玉はむ折、或は故鄕の方に、なつかしの父君母君、さては同胞の君達を省み玉はむ時、かゝる方にも心を用ひ玉ひて、假令暫しの間なり共、村夫子村女史を以て自ら任じ、日頃學びの庭に得玉ひつる事の、心を、わざとならず村人の心に入り易きやう、懇に說き玉ひなむには、のち〳〵までの贈りもの、之れに增すものなかるべしなんど、獨言つも、いつもながらの我老婆心にこそ。

片々録

◉十文字商會にて重過燐酸を外國より輸入し肥料として販賣す。之を用うれば米作に三四割方の增加あり。近來餘程賣り擴まりたる由なるが、其の最初は各地の頑固陋弊の百姓方を目當として廣告したるやう、玆に不思議の藥あり、何故とは知らねど、之を播けば非常の作德ありと言ひしに、藥と聞きて何れも用ひ見たるに果して効驗ありしかば、其後は、頑固の方々より最先に使用するに至りしとぞ。

◉和蘭の地味の非常に燥れたるは、多年、牛酪を製して外國に輸出し、土地の燐酸を失ひし故と言ふものあり。

●千住小松川などの野菜には、ひそかに小塚原の火葬灰を肥料にしたるが、維新後、かの邊の野菜、一時不作となり、味も餘程減りしとあり。之は、暫く火葬と云ふとの廢れ居りしが爲めなれど、近年はまた元の如き野菜となりぬ。

●娘が生れし時、桐一本植ゑ置かば、嫁入の比に、簞笥が出來ると云ふは本當の事なり。

●岡崎撫松が初めて洋行する時には、今の伊藤侯たる當時の俊介君は、お伴をしたり。其の御目見えの時、私はオクシもわげられますと言ひしに、「夫は大に調寶だな、御苦勞だが頼むよ」と言はれしとは今昔多感の談柄なり。此の撫松氏の兄たる角田氏が例の共救社を起し、明治の初年に八釜しかりし豚の飼養を天下に流行らせたるなり。其の趣意書は非常の名文なりと言傳ふ。

●砂糖を製する蕪菜と云ふが明治十三四年比、初めて行はれし時は、伊藤侯の厳君などは最初の試作者なりき。

●松方伯は農務局長たりしともあり、農業には元來篤志の人なりし、麻布本村にて廣き田地をもち、自から馬耕を試みられしなど、今は一と昔となりぬ。

隨感

『迎護』の圖に題す

天の一子を賜ひたるは祝福なり。左らば、彼子を招きて召し返し玉ふは否運なりや。足に荆棘の路を踏むとを要せず、毒蛇の口に噛まるゝ憂ひもなく、疾病艱苦の無き常久の春の國に遊びて、香を追ひ、蝶に戯れて、天使の保育を蒙むるは、寧ろ幸ひならずや。印度人、愛子の生誕を聞きて時として之を殺すに、其の怨言する所を聞けば、人生のあぢきなきを慨するにあり。蓋し此の哀れの浮世に生ひ立たせて、吾とひとしき憂苦にあはせんとの痛ましければ、夢に遊ぶ彷彿の彼の土に速には旅立せんとは祈るなるらし。もし其の情を察して慈親のなさけを念はゞ、彼等が爲す所必らずしも酷ならず。吾等も亦た愛兒の天に招かれて其の樂土に行くとの光榮を謝せん哉。左れど、つく〴〵と愛子の面を見まもりて、もしも此子に万一の事あらしめばと觀じ來れ、事前に胸さわぎて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

断腸の涙禁ずべからず、光明俄然没して世の暗黒となる心地のすべし。然りと雖ども、然と恩賜を辱くして、之が親たるの悦びを受け、障碍なく純白無二の愛を施すを得たる幸福は何をもて易へん。但だ只だ恩賜の主、時來れりとして聖座の下に召び還し玉ふとあらば、彼の慈しみある天使に托して羨むなく御下に返し、遥に行途を望みて吾が信を堅めんとする斗り也。吾も遠からず、行くべし、久しき別れとは思ふななど、聲をかぎりに呼ばんとする斗りなり。

因に曰く、本誌前々號に掲げたる『天賜』の圖に對し、此『迎護』のこころを畫きたるは獨國カウルバッハ氏なり。

○人心の機轉

人心機轉の妙は理解の域を脱し、之を自から測度す可らず、人も亦た端倪すべからず、但だ能く世故に經歷したるの士、自から其の消息に通ずるが如し。古人曰く、同舟相救ひ、同波相抱くと。人、事變艱難に同もに遭遇するときは、情感の契合不可思議にして交誼骨肉に徹す、たとへば血を合せ脈を續ぎたらんが如し。忽ちにして聯想同情の鼓動を一つにするこそ快けれ。かるが故に、舊交を温め、舊誼を復するなどには、總べて歳月廻周して紀念の當日前後となり、往時を忍びて追懐の情湧起するの機會に於てす。古より親の命日に同胞打よりて追善供養するは、親戚の交はりに鴻大の感化を與へしならん。其他、人生各種の交誼にして此に類するもの甚だ多し。此に至りて彌よ知る、凶運は必竟一時の悲にして、其の結果は大概ね幸福を來すとを。其の遂に幸福を來す所以、初めに悲痛せしが故に由るとせば、人生の悲痛は遂に福音の慶事にあらずや。人よ、眼前の涙にうるみて天光を暗しとするとなかれ、一度び眼を拭へば、輝々たる光明の更に燦かなるを見ん也。

○去年今夜とは何ものぞ

幼き兒等に、去年今夜云々の事ありしと語れ、渠等は未だ去年の何ものたるやを知らず、今夜と云ふに驚ろかされて、目を圓くして奇問を發するなるべし。渠等に來年を語るは容易し、之より幾つ寐たる後、丈の何れほど伸びる迄と言ひ聞かすれば合點することとの出來べければ也。可憐なるは渠等、過

去を念はず、年に十二月ありて一歳回轉すと悟ることを得ざるなり。天、渠等を未來の人となして過去の子とせず。迅速に其歩みを促して、回顧の思案なからしめ玉ふぞ有がたき。嗚呼、汝等安んじて樂天せよ、死せる不吉、汝等が軟かき頭腦を傷ふことを顧はず。

○人智本來兒戲にあらずや

去年今夜とは何ものぞ。端然靜座して、つく〴〵と念ずれば、己れも亦た稚童の如し、遂に其の何ものたるやを知る能はず。但だ憶ふ、舊事歷々として眼前にあり、活潑躍動して現在と異ならず。果して然らば、去年とは抑も何ものぞ。誰か哲士をもて稚童を笑ふ、人智本來兒戲にあらずや。

○かたみこそ今はあだなれ

生死もと迷と云ふか、迷の語をもて言はんには、生死を分明にすることこそ當然ならめ。吾、ひとり風景を觀て未だ全く樂しむことを得ず。必ずや、風景の奥に生ける詩手を覓め、又、吾儕に風景を相語る友を待つ。夫れ、生ける詩手は長久えに存在す、吾儕の友遂に滅せんや。左れど、むかし有りて今なき姿を念へば、如今滅したるかの感なき能はず。翻つてかの永遠に存するものを觀奉れば、初より姿なし、左らば吾友も亦た姿なくして有りとせん。憾むらくは、初め有りて今無きこそ空なる物思ひの種なれ。如かず初めより全く姿なかりしにはと思はんとすれば、否〳〵假初の現示なりとも暫く其姿の實在せしには如かざる也。一度世間に姿を現して吾躰に伴ひ、姿をかくして後吾靈に伴ふ。斯の如しとせば、人生不滅の特權の忝なき哉。こゝに至りて、お柳又は葛の葉などの絶命を思ひやり、之に交はりたる人の悲しみを歎く。姿をかくせし後に野狐老木に還りしと思はん人の、如何に情なきぞや。

○御大赦

御大赦の是非を言はんは恐れ多く又た詮なし。左れど多少密かに杞憂する族の疑を釋きて、恵澤の餘意を明かにするは無用にあらじ。蓋し、疑の人は、罪囚の俄に世間に出たるを恐るるものゝ如し。左れど此は大抵出獄す可かりし輩にて、世

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は何時かは其の出で來るを迎へざる可らざりしことを思はざる可らず。扨て何時かは出で來ることゝすれば、其の危險は相同じ。只だ成るべく多く遷善せしめんことを願ふ筈にて、其の感化の強大なると、今回の如き場合に放免したるをもて第一とす。惟ふに兇惡互罪の族は、過半改悔すべし。もし此度にてすら改ためずとせば、他日平時の出獄に際しては倍更の事なるべし。左らば世は到底其の恐れを免れざるにあらずや。もし到底之を免れずとせば、須からく感化の強烈なる時機に刺激すべし、これ切てもの好治療ならん。大赦の法の如きは與に賢き御處置ならずや。況して仁慈恵澤の大御心より發動せしをや。

○造り花

梅にしては、少と早過ぎたるものよと熟視すれば、生氣なき所分明となれり。奇しみて近づき見れば造り花なりき。扨ても巧妙に出來しよと感じて數日打眺めたるに、花は開くことを増さず、散ることをせず、素と是れ依然として變はらずにあれど、之をもて操と云ふものもあるまじ。

時文

◎清少納言　絲亭主人著　氏友社版

絲亭主人曩に『紫式部』の著あり、今又此『清少納言』を著す。主として枕草紙一篇に頼りて、清少納言の人物、才氣、文章を論ず。素より清少納言が傳記の考證たることは能はずして、單に一篇の論文なりと雖も、亦以て清少納言其人の一端を窺知せしむるに足る。以て婦女弟子の友たるを得べし。添ふに松島日記、清少納言家集を以てす。

◎交際心得　牧野著譯　十文字商會版

米人センソン氏著す所『ドント』は、米國社會交際の心得を書したるものにして、先年博文館にても『勿れ』と題して飜譯せしことありしが、今また新に牧氏之を譯して、十文字商會より出版す。

◎英武蒙求　依田學海著　博文館版

和漢古今の英雄偉人の逸事をば、彼蒙求の体裁に倣ひて相對照して、說述したるもの、文は學海氏が平易の筆に成り、以て少年讀者の好伴侶たるに足る。

◎少年詩話　野口寧齋著　博文館版

寧齋少年者流の爲めに詩を談じ、作詩の法を說く。加ふるにまた詩の變遷談ありて、詩の歷史を敎ふると簡明親切なり。附錄詩人の德儀は作詩者の知らざるべからざるものをいへり。

○第二閨秀小說　博文館版

去歲若松賤子、田澤稻舟、樋口一葉の三氏逝いてより、閨秀文壇頓に落寞たるの感ありき、世は聊つれども、今第二閨秀小說の出づるありて、之を繙けば、閨秀

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文壇は未だ決して人なきを憂へず、見よ錦心繡腸の女秀才の濟々さして多きとを。第二閨秀小說列する處の女流文才さ其作品さを見よ、『善惡の岐』以來久しく小說に筆執るとなかりし、中島湘烟女史の『一沈一浮』あり、小金井喜美子が例の麗筆に成る飜譯『心づくし』あり、『女鑑』に於て常に其才筆に接する𥫩井白魚女史の『深雪』あり、薄花女史の飜譯『小公爵』あり、石榑わか子の『やれかヾみ』あり、田中夕風女史の『子煩惱』あり、北田薄氷女史の『白髮染』あり、藤井ゆかり女史の『かへ玉』あり、穗積ふじ子の『うたかた』あり、古在紫琴女史の『心の鬼』あり、大塚楠緒子の『しのび音』あり、長田蕙香女史の『初戀』あり、花圃女史の飜譯『蛇物語』あり、三浦千鳥女史の『女波男波』あり、秋山露子の『さよ嵐』あり、附錄には、賤子の『ローレンス』、稻舟の『唯我獨尊』、一葉の『空蟬』の三遺稿を併む。

通じて之を見る、中には小說さ稱するに足らぬものも數々あれども、何もさもに我文壇が此等多くの女流文人を有せるとを賀せすんばあらず。此等女流が各其得意の女性的眼光を以て新壇に臨まば、我文界の進歩大に見るべきものあらん。今また此閨秀小說中の一二を擧げていへば、『一沈一浮』はあまりに簡短にして、飽き足らぬ心地し、『小公爵』は、飜譯の筆に、今一層の研磨を要し、其文才の尤も聲かるゝは『初戀』にして、其佛蘭西語に通じたるの才能を以て、鷗外氏の文致に競はんさして、極めて蔑り難きものあり。蕙香女史さは誰ぞ、若し夫れ長田秋濤氏の令室其人なるとなきか、伉儷共に佛語を能くする羨むべし。『心の鬼』は文筆やうやく熟妙の域に在り、附錄の三遺稿に就きては別に爰に評せず。

博文館版

◎つり的　饗庭篁村作

博文館は一度び太陽に掲載したる小說を、或は『太陽小說』に合し、今は又『袖珍小說』に分つ。其第一編は、篁村の『つり的』なり、篁村例の滑稽の筆を以て、滑稽演劇の脚本さにもさらのしたるもの。添ふるに、『小說家の片商賣』『都名所圖繪の版元』『韭不狩の記』、みな讀むべく、殊に上二篇の如きは、頗る有益なる談話なり。

博文館版

◎間一髮　思軒居士譯

袖珍小說の第二編は思軒居士の『間一髮』にして、ポーの作『ザ、ピット、エンド、ザ、ペンヂュラム』を譯したるものなりさいふ。

博文館版

◎僥倖　幸田露伴作

袖珍小說の第三篇は、露伴の『僥倖』なり。添ふるに『將棋』『わが失敗』『蝸牛庵鬼語』『駈ある記』等を以てす。

博文館版

◎彫像師　內田不知庵譯

第四篇の袖珍小說は、コンウエイ作不知庵譯の『彫像師』なり。袖珍小說通じて短篇なれば、こはまた便利のよみ本なるべし。

未讀の新刊書◎花紅葉◎與り稱◎感化事業の發達

女界雜俎　一月下半期

婦人の宗教的信仰（觀潮巷）
女子教育の方針二（學海の餘瀝）
英照皇太后陛下の御懿德
むかふ鉢卷（三鑒子）
婦人矯風事業（パリシユ女史）
米國女學校の生活（加藤錦子談）
日本婦人に就ての注意（西村茂樹談）
セークスピーアの女性論（島海）
私生兒の出生（矢竹生）

日本宗教第二卷第七號
時事新報　一月廿日
同　一月卅一日
國民新聞　一月廿八日
同　一月廿九日
太陽第三卷第二號
同
救世第十九號
統計學雜誌第百廿九號

投書

◎篤志看護婦の論功行賞

朝鮮釜山　傍觀子

吾人は頃日の官報紙上に於て、日淸事件に篤志看護婦たりし人の其功勞に依りて恩賞を蒙りたる報を得たり。中に就て、當時朝鮮に在留せし婦人を摘出すれば左の如し。

甲　仁川在留婦人にして萬里倉の軍に看護婦たりし者

佐藤ひさ　高橋れん　兒島はま　河原あさ　下田ふじ
内山いし　三井たか

以上賜金拾圓

乙　釜山在留婦人にして全地兵站病院に看護婦たりし者

藤井よし　石尾ちよ　三好きく　中崎ひで　森川かく
香椎つれ

以上叙勲八等賜金貳拾五圓

顧みれば日清兩國戰を開き、清兵は牙山を根據とし、我兵は龍山に駐屯し、鷄林の風雲太だ殺伐に豐島の瘴煙となり、牙山の彈雨となり、腥風颯々として漢城の天地を蔽ひ、危機濱迫、内外頗る騒然を極め、當時京城仁川在留の老幼婦女は多く難を本邦に避く。嗚呼此一大變に際り、纖弱を顧みす、奮然決意、身命を提げて、先登第一點血の軍に投じ、患者看護の衛に當り、以て萬分を國事に報じたる者は誰れぞ、是れ豈に前に掲くる仁川篤志看護婦の一隊其人に非ずや。

彼等は實に篤志看護婦として日清事件の先發隊（而も海外に於て）たるのみならず、同時に我邦の戰役史上赤十字社以外に在りて博愛事業を海外に蹈したる嚆矢として、特筆大書すべき價値と名譽とを有せり。斯る故にや、彼等が軍隊其他一般より歡迎を受くること、却て意想の外に出て、石黒野戰衛生長官の如きは、此報を聞き、直ちに左の書を小池軍醫部長に與へたり。

右の者儀、病院看護に從軍志願の儀、領事館へ願出候趣、了承、右は病院へ使用無差支候、尤も萬里の異郷、殊に此事變の時に當て、如此願出候は、愛國の至情より出て候儀に付、小官より姓名書を作り、皇后宮大夫を以て、皇后陛下へ申上置候也。

明治廿七年八月

又當時軍隊慰問の爲め、差遣はされたる勅使中村陸軍中佐の如きは、親しく彼等を引見し、勅使の資格を以て左の意味の優渥なる賞辭を與へたり。

纖弱婦人の身を以て、異域に在り、奮て軍人の負傷疾病看護を出願して、誠實に働きたる義氣、洵に奇特と爲す、尚ほ此上邦家の爲めに、至情を盡さんことを望む。

此他内外の新聞雑誌上、彼等の志を幾とし、行を壯として、或は序を作り、或は詩を賦し、論説に雜報に、如何に彼等を稱揚歡迎したるかは、其當時に溯りて知る人ぞ知らん。全國の婦女子は是よりして益々動き、釜山に廣島に、續々として多數の看護婦を見るに至る。彼等が篤志看護婦として、一種の導火線たりしは、覆ふべからさるの事實にてありし也。

彼等は實に看護婦の先登者たりしのみならす、其服務に於ても亦た他の各地とは比較的多くの辛酸を嘗めたる者、釜山廣島の如きは、實際戰鬪地にあらざりき。萬里倉は之と異なり、間近に砲聲轟き、瘴霧腥風と混じて襲來し、當時最も危險なる戰鬪線内にてありき。且つや時氣三伏炎熱皮膚を焦し、流汗泥を成すの候、右に銃傷の患者を擁し、左に赤痢の病者を抱き、恐々篤々周旋到らざるなく、纖骨なる大和武士をして豆大の感涙を落さしめたるもの、亦た必ずしも謂はれなきに非ざる也。而かも彼等は生平深窓に淑徳を守るの繊弱婦人のみ、其茲に出でたるもの唯々義の一字に在りて存す。

要するに、仁川篤志看護婦の行動たるや、之を凡ての觀察點より打算すれば、決して釜山等の比に非す、大に其趣味と事情とを異にせり。然るに功勞の結果は却つて前掲の如く、當時の實況を目擊せる吾人の脳裏には、甚だ之を推するに苦むと同時に、甲乙二者不權衡の感なき能はざる也。

盖し受賞者其人は感泣之を拜受して、決して其輕重を私議せざるべく、吾人も亦た其輕重を私議せざると共に、敢て彼等の爲めに云々するものに非す、唯々篤志看護婦として、戰役に從事し、救護の任に當りしは、實に日清事件が嚆矢にして永く史乘の材料となり、後世の龜鑑たるものとすれば、今後の爲めに一言を試み以て世の注意を促し置く而已矣。

片々

◎第二閨秀小説　出づ女秀才頗る多く、而も其秀才は多く文に長じ、詩に長じ、歌に長じ、畫に長じたり。また外國語に長じたるもあり、女界の文壇多望。

◎國民新聞　に三傑子あり閨秀小説を譏つて曰く國家＝小説＝女＝〇、小學校作文十女＝國家小説とし、なほ紅梅焼一の駄菓子なれど女の焼くによつて賣れるが如しと。

◎熊本縣の女教員　熊本縣は數に女教員の必要を認めて、師範學校内に女教員養成講究所を設置し、一年中の學課程を踏んで、客年已に三十餘名の卒業者を出したるに、未だ住所の定まらざるもの多數。よりて同縣新聞紙は初めに女教員の切要を認めて、今や之を無用のものとなすかと譏す。

◎福島縣に一老媼あり平素貯金する處二千圓あり、死に臨んで之を一族九人に頒つ。而して嫁女に與ふると最も多く、即ち千圓を以てす。其志や芳しく其見や高し。此老媼其嫁に與ふる千圓の讓渡書に曰く

一通用金一千圓也

一拙者のこし申候私嫁女此上もなき孝心にて何角日ごろ心に懸くれ晝夜共に心に懸くれ兄弟迄もくれ〳〵心を付與れ大いにありがたく存候何卒返禮と存候處金子をいきかたみとして千圓譲り相渡し申候此金册若き時よりみをつゝしみまつ始をいたしたるものゆゑに何角心を付てまつをいたし此上の大金にいたし其上は子孫に譲り相渡す家内に預入申候節一族を守りて朝夕に神佛を拜し御先祖大せつにいたし子供大せつによろしき様に御ふいれ可被成候節一家の用心猶〳〵大せつに被成猶ほかを差いい〳〵御頼申候
まづはこれ迄書置申候目出度かしく

明治廿九年十一月二十五日　　玉居宗次郎母　さだ

嫁おくらどの

誠心聞る物すべきかな。

◎私生兒　私生兒の産出する道徳の頽敗と、生計の困難と、人民の無智なるとに因す。統計學者上矢竹生の調する處によれば、私生兒の數比年累進して、明治二十六年には、全出産兒中私生兒の數百中の六、二に當り、而して又私生兒の最も多く、且つ年々増加するは、滋賀、石川、京都、大阪、兵庫、長崎、福岡、熊本の諸縣なりといふ。

◎國枝孝氏　吾人を目して女子を御得意とするが故に筆を曲ぐるものとなす。夫れ然乎、吾人はたゞ具眼の識者を俟つものなり。吾人の再び辯を交へざるは、石に向つて說法するの無益なるを知ればなり。

〜〜〜〜〜〜〜〜

時報

◎孝貞賞賜

山形縣羽前國西置賜郡豐榮村
佐藤嘉次妻　田村はる

資性孝順能く舅姑及夫に事へ一家輯睦す舅姑中風を患へ尋で夫も亦疾に罹り自ら起臥すること能はず生計困乏なるも湯藥甘旨を進め承歡懇篤日夜衣帶を解かず看護其力を盡す舅姑相踵て歿す之に事ふる猶ほ生前に於けるが如し誠志篤行洵に奇特とす仍て其賞として特例金二十圓下賜候事

明治二十九年十二月二十三日

賞勳局總裁正三位勳一等子爵　大給恒

◎裁縫女學校　德島縣那賀郡桑野村桑野裁縫女學校なるもの新に設立せられ、校主は吉田クヰ子にして、設立の主旨は專ら女子に家政學を修めしむるに在りて、修身及裁縫を教授するものといふ。

◎クーパー夫人の逝死　北米合衆國に在りて、幼稚園教育に頗る熱心し、其成績また頗る見るべく、大に教育界の重きをなせるクーパー夫人は、客臘、不幸にも宅内瓦斯充滿の爲、令嬢某と共に、自宅に於て窒息死去したり。

◎清皇帝外國婦人を賞す　支那政府にては日清戰役に於ける滿州病傷兵士の療養不十分なりしに心附き、先頃直隸總督は牛莊附近に野戰病院を設立し、米國にて醫學修業を卒へ歸國したる支那婦人金氏を擧げて、其の院長と爲し孜々として職事を督勵せしめ居たる折柄、之を聞及べる支那在留の外國婦人アンデルソンは、當て支那赤十字社なるものを組織し社長には同國駐在澳洪總領事ハース氏を推し、自ら其の副社長となりて、大に野戰病院の事業輔助に勗め、既に多數慈善家の同意を得、當時三千兩の金圓を該病院に寄附したり。事皇帝の叡聞に達し御感淺からず、此程アンデルソン婦人に一の勳額を賜はりたるが右は長サ六尺、幅二尺三寸ありて、全體黃色に塗り上げ、中央に皇帝の御親書として、慎樂素善の四字、下に直隸總督の判あり、上部に金龍の模樣ありて其の中に勳賜の二文字を入れ、何れも浮き彫りに刻みたる極めて莊麗なるものなりと。

（東京日々新聞）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

新國學 第五

論說

○嗚呼悲しき哉　高橋龍雄
○新年書懷　日高德太郎
○日本經濟史に就きて
○佛教の和歌に及ぼせる影響　星川清成

文苑

○天明金柑の由來　逸見仲三郎
○草枕　紫草
○小枝笛(下)　汝衣花
○保元より承久迄の事ども　物集高見
○岡山縣常中學校　東洋小史
○あはれ稚兒　白梅軒主人

雜錄

○國史學研究上の意見　大槻如電
○二條良基公の逸事　[illegible]興正直
○叢間の蟹御階の鳴神(承前)　鴨脚秀克
○系譜　東洋小史
○高字をカグに假りたる事　木村正辭

雜報

○立憲制度に於ける我が國史○經史上の人物批評○偏狂なる國家主義とは何をいふか○誰が我が學ぶ所を樂め○文學者の天職○文學者の缺點○大狂才○文を簡ならしめよ○文學界○戀愛小說家を罵る○經史小說○新體詩につきて○新體詩と音樂と○めさまし草○末松博士と鐵幹氏○己惚○三たび帝國文學記者にいふ○廣告

新年附錄

○雪なだれ(狹衣迷十人)○夢(秋野)○人生觀(梅園)○青山(宮木花笠)○雪(鳥野幸次)○待春(飯田武鄉)○鷄の聲(星川清成)○三の緒(竹谷竹嶺子)

每月一回二十日發行定價金七錢

發行所 東京麴町區飯田町五丁目八番地 國學院同窓會

早稻田文學

二月一日發兌 第廿七號目次

●近松研究第五會
○『國姓爺合戰』樂譜
○音樂上より見たる『國姓爺合戰』……鐵笛子
○『國姓爺合戰』の修辭、影響、雜……會員一同
●鬼作左……湖州
●『月草』を讀みて……島村抱月子
●牧の方(北條第の奥の間、牧の方の寢所)……なゝや主人
●無絃琴(小說)……小杉天外
●世すて人(小說)……綠堂野史
●上下の二句を取りて……子規子
●漢詩……寧齋、東郭、綱齋
●文學と風俗との關係……櫻所居士
●桐一葉の舞臺面……竹柴作造
●謂はゆる穿鑿……管見生
●掛持記者の稱について……山岡嶺雲
●新體詩二篇

彙報 ○文學界 ●上方人士と小說家 ●出版物と慫慂の聲 ●昨年の文壇對新聞雜誌 ●新年の新聞雜誌 ●文壇消息 ○史學界 ●廿九年の史學界 ●史料總集 ●片々 ○雜界 ●廿九年の社會 ●書畫 來の不景氣 ●禮服制定を望むの議 ●新聞紙の社會的責任其他三項 ○文學細目 ○新刊十二種 ○附錄 昨年度本誌總目錄

每月二回發兌定價郵稅共一部十錢六部五十七錢十二部一圓八錢

發行所 東京牛込區大久保余丁町百十二番地 早稻田文學社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

司法大臣清浦奎吾君題字 湖處子序
前大審院長三好退藏君序
小河滋二郎君序 留岡幸助著

感化事業之發達

定價 二十錢
郵税 四錢

我國今日まで未此種の書あらず我國民は不幸にして未此種の事業に其趣味を有せざる也而も早晩而目なる治家、宗教家等の眼中に實際問題として映じ來るべきは實に此問題に外ならず若し日本たるもの物的文明而已を以て滿足する能はずんば社會改善の最大要務として是非とも此問題に到着せずんばあらず本書は著者自ら米各州に至り監獄及感化事業の現況を視察し其研鑽する處を以て歐洲各國に於ける此事業の實例を列擧し進んで我國の情に應用すべき方法等を論究したるもの也書中感化院と監獄に關係を論ずる一章の如きは犯罪を減少し犯罪者を改良せんと欲する施政家の一讀せざるべからざるものなり故に必ずしも國家經綸の政治家と言はず必ずしも慈眼愛腸の宗教家と言はず苟も社會改良の高志を懷くものは必ず本書に備へて研究せざる可からざるなり而して文章の流暢思想の健全なるは讀下の際必ず腦裏に反映せずんばあるべからず敢て茲に贅を勞せず

發兌 東京市京橋區山下町一番地 警醒社書店

ドクトル、オブ フヒロソフヒー 石坂正信君序
統計集誌記者 田中太郎君著

犯罪救治論

紙數二百餘頁
正價金二十錢
郵税金六錢

本書は統計的、社會的眼光を以て犯罪の原因を諸種の側面より觀察し併せて其豫防及救治の方法に關し事實を基礎として精細に論述したる一編の社會改良策なり、本書は客歳出版以來「ペノロジー」文學に對する價値ある寄附として大に江湖の讃評を受けたるものなり、社會問題に留意せらるゝ諸君の一讀を要す

發行所 東京銀座四丁目二番地 教文館

明治女學校圖書寄贈報告 第三回

一トーマス、ヒルフッド○私の王○生活の初○文明史○オクス、フードのジョン、ブラフン○戰○バーカアースの旅○フオーフヒルドの牧師○朝鐘○基督信徒の經驗○ジョンベトン自傳○天路歷程○エリサベス、フライ 各一部 松崎直殿

一ヘンリー、エスモンド○讀書入門○英米名家文集○第二讀本ロビンソン、クルーソウ○英文の原○文章○語學○バインパサ○數學○サー、ロジア、ド、カバレイ○ローヤル、リーダー○日本文學全書八九 各一部 島田巻子殿

一新地理學 一松島剛殿

一王陽明○平田篤胤○文學者となる法○教授法 一部 同文館殿

一聖書辭典○日曜學校の説教○近來の傳道史○枕草子 川井運吉殿

一德婦美譚 二冊 西岡正親殿

一和文讀本 ゼボン氏論理學 一冊 須郷八重殿

一談窓詩話○植物問答五百題○物理問答三百題 一部 若海錫子殿

一校訂竹取物語○學校共進會○算術敎科書 各一部 松田甚八殿

一ヘルベルトに關する攻究 各一部 中島半次郎殿

一眞理易知○開闢新論 各一冊 津田次郎殿

一近世の論理學書 中島力造殿

一羅西亞全論 神保小虎殿

一如溫納屈斯小傳○英國清敎徒記事○講壇之英傑 中野悦興殿

一日本樂譜○獨佛戰史○支那處分案 各一部 能谷直孝殿

一植物學概近之進歩○隱花植物大意 各一冊 三好學殿

一故農學士藤田九三郎氏傳 一冊 宮部金吾殿

一ベースボール 高橋彦太郎殿

一言海 一冊 中村英殿

一人名辭書字典 一冊 三宅秀殿

一大奧の女中 一部 池田晃淵殿

一新撰化學敎科書 一部 吉山彦之郎殿

一日韓古史斷○德川政敎考 各一部 吉田東伍殿

一詞格法 二冊 星野久成殿

故若松賤子女史譯述

小公子

全一冊洋裝美本
番數三百五十頁
正價金三十五錢
郵稅　八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるゝこと數十回、一代の流行を左右して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化し、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し、讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるるを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや。少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を棄る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるゝこと切なり。即ち玆に其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、鄉友松井昇氏は密畫を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大賣捌　東京麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

社告

鈴木弘恭大人講述
市川靜淵、小此木秀野合著

百人一首講義

正價金廿八錢
郵稅　四　錢

俳諧史傳

定價　二十七錢
郵稅　四　錢

巖本嘉志子

若松賤子
英文集

正價六十錢
郵稅　四　錢

ベビー手みしん

正價　五　圓

明治廿七年二月十四日內務省許可
明治三十一年二月九日印刷
明治三十一年二月十日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY